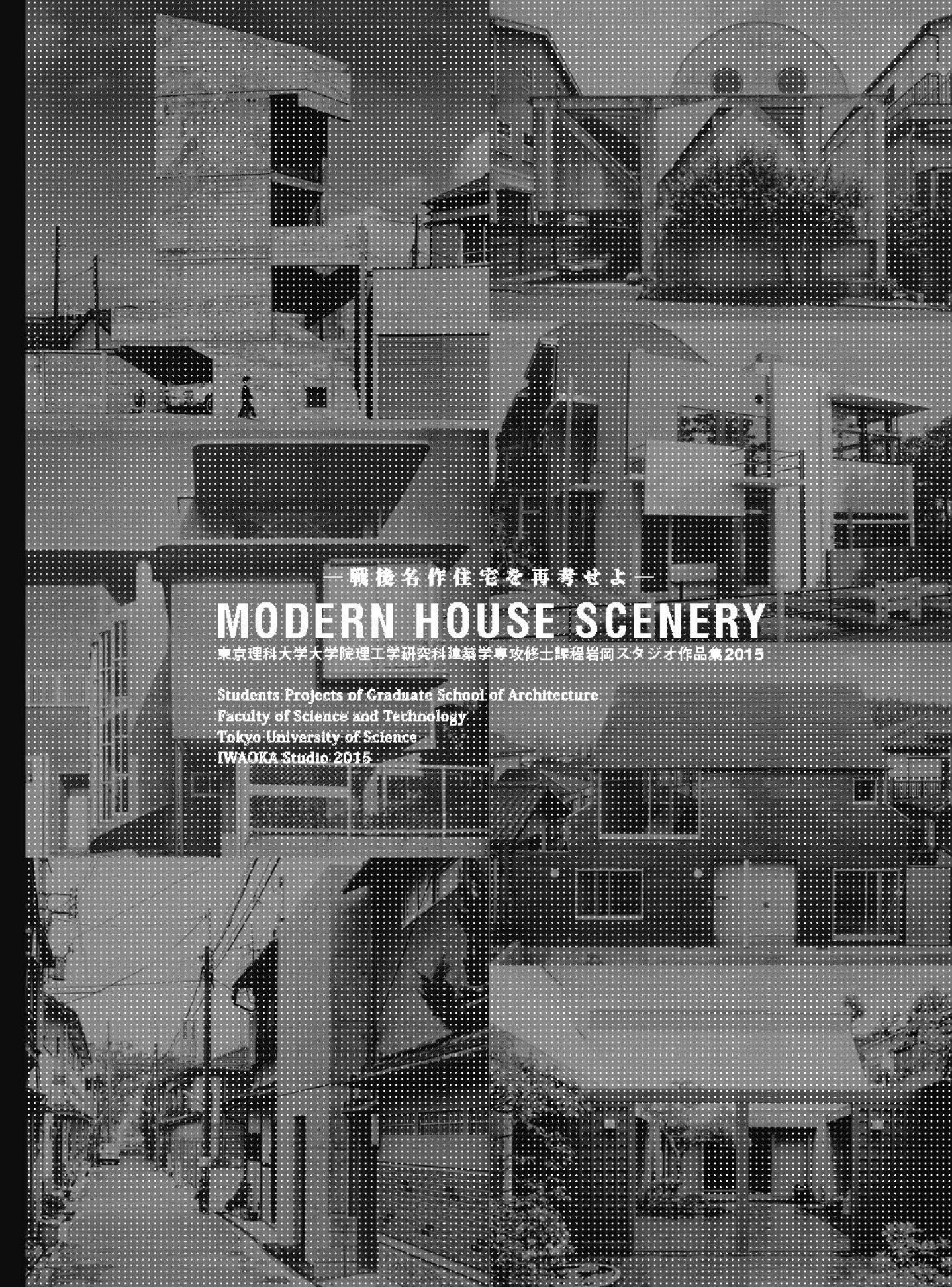


—戦後名作住宅を再考せよ—

MODERN HOUSE SCENERY

東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程岩岡スタジオ作品集2015

Students Projects of Graduate School of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science
IWAOKA Studio 2015

MODERN HOUSE SCENERY

東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻
岩岡スタジオ作品集２０１５

Students Projects of Graduate School of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science
IWAOKA Studio 2015

Contents / もくじ

CHAPTER 1

概要 / Introduction

06 審査講評会 / Jury judging
12 課題名 / Subject
14 出題者 / Studio master
岩岡竜夫
16 選定住宅作品 / Selected masterpieces
17 序文 / Preface
存在論としての「建ち方」　著：大村高広

CHAPTER 2

住宅作品集 / Collection of works

20 1924 / シュレーダー邸 ……→ 2015 / しゅレーダー邸
G.T.Rietveld　　國分元太　一山名研究室 M1
30 1959 / 山田守邸 ……→ 2015 / あるまじろん
山田守　　外川喜裕　一岩岡研究室 M1
40 1966 / 塔の家 ……→ 2015 / 木塔の家
東孝光　　齋藤誠司　一安原研究室 M1
50 1971 / 松川ボックス ……→ 2015 / ＃4
宮脇檀　　玉江将之　一岩岡研究室 M1
60 1976 / 住吉の長屋 ……→ 2015 / 住吉の隠屋（なばりや）
安藤忠雄　　堀越一希　一岩岡研究室 M1
70 1976 / 上原通りの住宅 ……→ 2015 / 「突撃隊」軽装備で前へ
篠原一男　　大村高広　一岩岡研究室 M1
80 1978 / 今宿の家 ……→ 2015 / 金が谷の家
坂本一成　　江間匠太　一岩岡研究室 M1

CHAPTER 3

記録 / Report (archive, credit)

92 Statement / 声明
〈外景〉として都市住宅　著：岩岡竜夫
乃木坂ハウス
94 Architect / 選定名作住宅の設計者概要
96 Member / 2015 年度修士課程岩岡スタジオ履修者一同
98 Epilogue / あとがき



Chapter 1 : Introduction

概要『戦後名作住宅を再考せよ。』

審査講評会 / Jury judging @二号館四階オープンスペース

「修士課程最終課題」である本審査会では総勢7作品からなる住宅模型(縮尺1/50～1/20)及び周辺敷地模型が机上へ一同に並び、各自持ち時間3分を目処にプレゼンテーションが行われた。廊下を歩く学生達は突如現れた模型群に驚かれて、わらわらとオーディエンスとなり集まってくる。二号館四階オープンスペースで行われた対話形式のパネルディスカッションの周囲を学生が取り囲み、予定していた時間を大幅に超えて、議論は長丁場へと発展した。

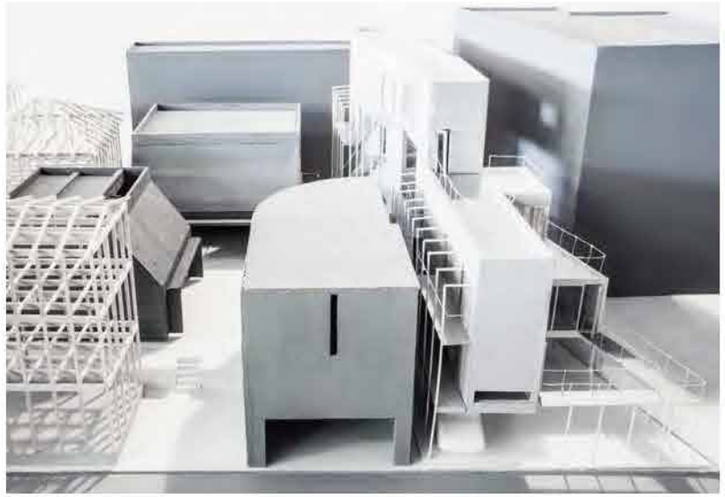
審査員と学生が放つ議論の中心は、自ずと住宅の「建ち方」へと集中していく。〈外景〉として現れる表層のみならず、現代住宅として、名作住宅の目と鼻の先に建つに相応しい〈内部空間〉に至るまでその設計思考が与えられているのか。最終講評を経た結果、優秀作品として選ばれた二作品は、No.03 齊藤誠司さんの「木塔の家[fig1]」とNo.05 堀越一希さんの「住吉の隙屋(すきまや)[fig2]」である。対象とする名作住宅は「塔の家(東孝光)」と「住吉の長屋(安藤忠雄)」というどちらも都市型狭小住宅の代名詞であり、二人とも前面道路を隔てた真正面に自身の敷地を設定している。「木塔の家[fig1]」は幅員約16m、商業ビル群に挟まれた外苑西通りに〈木質化のフロントランナー〉として構えるのに対し、「住吉の隙屋(すきまや)[fig2]」は、幅員4mに満たない住宅密集地に〈カメレオン〉のように擬態しその気配を潜めている。まさに真逆ともいえる敷地コンテクストと「建ち方」を持つ両作品は、名作住宅に対して決して消極的にならず、むしろ〈異様な〉アグレッシブさを持っている。このような、振れ幅の全く異なる二作品が優秀賞として選定されたことは、結果として大変興味深いことである。


fig1. 齊藤誠司さんの住宅作品「木塔の家」


fig2. 堀越一希さんの住宅作品「住吉の隙屋」





























課題名 / Subject

修士課程最終課題

『〈外景〉として都市住宅』

Modern House Scenery

― 建築と街並みとの関係を再考する ―

現代建築と周辺環境との関係を再検証する
建築作品を一歩引いて眺めてみる
住宅によって新しい街並みの構築は可能か

具体的な街並み景観を構成している著名な〈住宅作品〉を１つ選定し
その住宅と周辺環境との関係を分析する

さらに、

その住宅作品に近接する敷地を借りて
そこに新たな〈住宅〉を提案する

デザインプロセス / Design process

RESEARCH	1.	著名な住宅作品Ａの選定
	2.	住宅作品Ａの分析
	3.	既存の街並みＢの分析
	4.	Ａ＋Ｂの分析
DESIGN	5.	新たな住宅Ｃの敷地選定
	6.	新たな住宅Ｃの設計
	7.	Ｂ＋Ｃの分析
OUTPUT	8.	住宅作品Ａと新たな住宅Ｃの関係 Ａ＋Ｃ
	9.	新たに作られた街並み全体の分析 Ａ＋Ｂ＋Ｃ



タイムテーブル / Time table

2015. 09. 16　課題発表

本設計課題履修者は課題出題者より課題文を提示され、複数スタジオから希望選択制によってスタジオを決定。（※岩岡スタジオでは課題を進めるにあたり、名作住宅作品を選定するが、竣工後約２０年以上経過した、著名な建築家による専用住宅のみを選定対象として認める。）

11. 15　中間発表

選定した名作住宅の決定及び、設計する対象敷地を明確化する。
過去から現代へ街並みのサーベイを含めたリサーチ結果及び、設計趣旨の概要等を、各自持ち時間３分をもってプレゼンテーションを行う。発表形式は自由（パワーポイント、模型、パネル等）。

12. 02　最終講評

周辺敷地模型及び、設計を行った住宅模型を 1/50~1/20 で表現し、各自持ち時間３分・質疑応答５分をもって、課題出題者を前にパネルディスカッションを行う。発表順は選定した名作住宅作品の竣工年が古い順に行う。

12. 31　入稿締切

最終講評を行った後、本書を出版する入稿データを作成。
マージン 160mm × 227 mmの見開き４ページに、サーベイを含めた設計提案の図面、ダイアグラム、テキスト等をレイアウトしたデータを年末を締め日として入稿。

2016　出版

出題の意図 / The intent of Subject

私が以前通勤していた大学の研究室は東京都渋谷区の富ヶ谷にあった。閑静な住宅街の真ん中に小さなキャンパスがひっそりと建っていたが、「上原通りの住宅」はそのすぐ近くにあってひときわ異彩を放っていた。数年後、〈上原通り〉とは別の道沿いに、建築家やデザイナーの住宅が次々と現れ始めた。竹の家、ベニヤの家、コンクリートの家、ガラスの家。自己主張の激しい個性的な〈住宅〉の外観がバラバラに隣接しあう風景、そこには確かに東京の街並みの自由さがあったのだが、果たしてそれは〈街並み＝外景〉といえるものなのだろうか。点としての建築作品は線としての街並みを構成することができるか、そして既存の街並みに対して新たな図と地の関係を築けるか、それが今回の課題意図である。

出題者 / Studio master

岩 岡 竜 夫
Tatsuo Iwaoka

概要 / Overview

名称　東京理科大学 岩岡竜夫研究室
主宰　岩岡竜夫（一級建築士、東京理科大学理工学部教授）
所在地　アトリエ：東京都港区南青山 1-17-3 乃木坂ハウス
　　研究室　：千葉県野田市山崎 2641
　　東京理科大学野田校舎二号館四階岩岡研究室

プロフィール / Profile

1960　長崎市生まれ
1978　長野県立松本深志高校卒業
1983　武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業
1985　同大学院造形研究科建築学専攻修士課程修了（芸術学修士）
1987-1988　フランス・パリ建築大学第 8 分校留学
1990　東京工業大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了（工学博士）
1992　東海大学工学部建築学科専任講師
1993-1999　東京工業大学非常勤講師（図学）
1995　同第二工学部建設工学科助教授
2003　同建築デザイン学科教授
2011　東京理科大学理工学部建築学科教授、現在に至る

建築作品 / Architecture

1998/05　立体土間の家 ―戸建住宅
1999/09　T 平面の家 ―戸建住宅
2000.03　アピタ戸祭（共同設計）―集合住宅
2000.05　対屋の家 ―住宅＋倉庫
2001.12　八丁堀のローハウス ―戸建住宅
2002.08　i-Box ―移動式小屋
2003.04　イワサキ・アイテクノプラザ
　　―外装リフォーム
2003.08　台形面の家 ―戸建住宅
2005.05　バレエの家 ―住宅＋バレエスタジオ
2005.12　ラセンの家 ―戸建住宅
2007.05　アライブ本社工場 ―工場＋オフィス
2006-2010　エクアス小石川林町（共同設計）
　　―分譲マンションの建替え
2011.3　バレエの家 II ―住宅＋バレエスタジオ
2011.12　乃木坂ハウス ―戸建住宅＋アトリエ
2012.04　福浦ハウス ―戸建住宅の改修
2012.10　KDH ―組立式小屋
2014.08　中落合のローハウス ―戸建住宅

総評 / General comment

この課題には大きく３つのタスクがある。（1）現存する著名な住宅作品を各自選定してそれについて徹底して調べること。（2）その住宅が立地する場所の周辺の様子を調べること。（3）その住宅に隣接する敷地を借りて新たな住宅を提案すること。建築雑誌などの画像メディアでは、特に都市に建つ住宅に対して、それが実際に建つ周辺環境との関係を通して具体的に語られることが少ない。そこでここではまず対象とする住宅作品について、その中身はもとよりそれが立地している周辺環境も含めてリサーチをおこない、その住宅に内在する〈街のコンテクスト〉を見いだすことから始める。「シュレーダー邸（1924）」から「今宿の家（1978）」まで、学生が選択した７つの住宅はみなポピュラーな作品であるが、まず建物と周辺環境との関係を読み解くことで、それぞれ新たな発見と、住宅設計に対する新たな表現が個別に見いだされたようである。

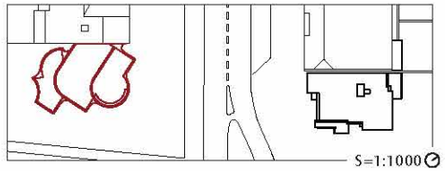


fig1.「中落合のローハウス」遠景

fig1＝アトリエ・アンド・アイ岩岡竜夫研究室「中落合のローハウス」（2014） ―戸建住宅
撮影協力：山田新治郎（Shinjiro Yamada）「山田新治郎写真研究室」〈http://www.yamadashinjiro.com/〉



選定住宅作品 / Selected masterpieces



1924 ·····→ 2015

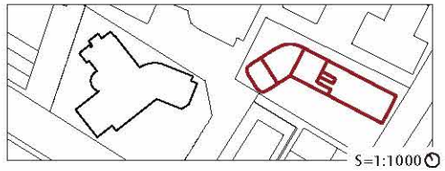
『シュレーダー邸』
Schroder House

設計：G.T.Rietveld
敷地：ユトレヒト
建築面積：94.7m²

『しゅレーダー邸』
Shu-roder House

設計：園分元太
敷地：前面道路向正面
建築面積：108.8m²

01 p.20



1959 ·····→ 2015

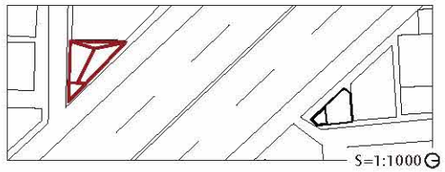
『山田守邸』
Yamada Residence

設計：山田守
敷地：港区南青山
建築面積：143.7m²

『あるまじろん』
Armadillon

設計：外川喜裕
敷地：西側隣地
建築面積：86.1m²

02 p.30



1966 ·····→ 2015

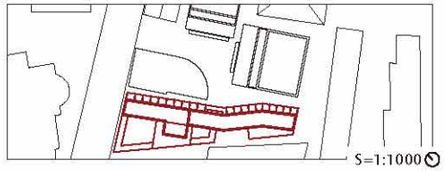
『塔の家』
Tower House

設計：東孝光
敷地：渋谷区神宮前
建築面積：11.8m²

『木塔の家』
Wooden Tower House

設計：齊藤誠司
敷地：前面道路向正面
建築面積：32.6m²

03 p.40



1971 ·····→ 2015

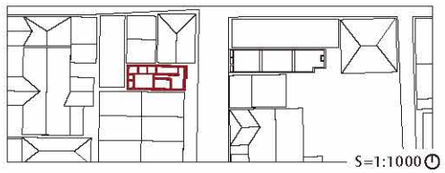
『松川ボックス』
Matsukawa Box

設計：宮脇檀
敷地：新宿区西早稲田
建築面積：88.5m²(#2)

『＃4』
Matsukawa Box #4

設計：玉江将之
敷地：西側隣地
建築面積：98.0m²

04 p.50



1976 ·····→ 2015

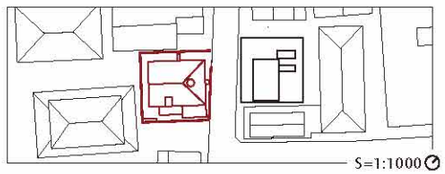
『住吉の長屋』
Row House, Sumiyoshi

設計：安藤忠雄
敷地：大阪府住吉
建築面積：33.7m²

『住吉の隠屋（なばりや）』
Spy House, Sumiyoshi

設計：堀越一希
敷地：前面道路向正面
建築面積：30.4m²

05 p.60



1976 ·····→ 2015

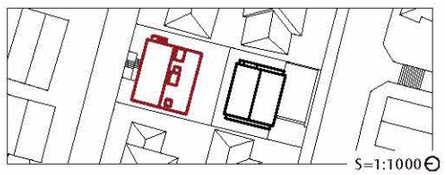
『上原通りの住宅』
House in Uehara

設計：篠原一男
敷地：渋谷区代々木上原
建築面積：80.5m²

『「突撃隊」軽装備で前へ』
Go ahead! Light-armed troops

設計：大村高広
敷地：前面道路向正面
建築面積：53.6m²

06 p.70



1978 ·····→ 2015

『今宿の家』
House in Imajuku

設計：坂本一成
敷地：横浜市今宿
建築面積：57.4m²

『金が谷の家』
House in Kanegaya

設計：江間匠太
敷地：北側隣地
建築面積：66.3m²

07 p.80

序文：存在論としての「建ち方」

建築は、それ単体として存在することはできない。周囲の環境との相互作用のなかで絶えずもまれ、ゆがみ、平衡することでその存在を世界に定着させる。「この建物は建ち方がいい」という場合、大抵はその建物と周辺の環境との関係を指して、そしてそれらが共同してつくる全体性を指していう。とはいえ、「建ち方」というのは実は、なかなか定義の難しい概念だ。あるときは「配置」であり、あるときは「構え」である。でも、それは「建ち方」のある断面を示しているにすぎない。たとえば、コンテクストが一切存在しない場所があったとする。それをひとまず〈原—砂漠〉と呼ぶことにしよう。〈原—砂漠〉には、文化も歴史も存在しない。周囲に建物はなく、光も影もない。しかしそれでも建築は、それ単体で存在することは許されない。それはたとえばその建築の架構が、事実どこかに存在する大工が加工した柱や梁であり、どこか特定の山林から切りだされた木材であるからだ。建築を構成する大量の部品は、それぞれが異なるコンテクストを内包した、どうしようもなく具体的なオブジェクトである。複雑に絡み合う産業構造の網の目の中で、種々雑多な特定の物・者の活動の果てに、その結節点として建築は存在する。だからこそ〈原—砂漠〉においても、建築の物質としての実在を認める限り、「建ち方」という議論は成立しうる。「建ち方」は「配置」のしかたや、「構え」のありかただけを問うものではない。「建ち方」は建物の存在のしかたを問うもの、つまり建築における存在論である。

＊　＊　＊

建築における存在論といえば、多木浩二の『生きられた家[註1]』が頭に浮かぶかもしれない。しかし多木がおこなったのは、建築を通して人間の生を、その存在の有様を考察することであった。一方、「建ち方」を考えるということは、(人によって)生きられた家ではなく、(建築によって)生きられた都市を考えるということになる。都市を通して、建築の存在を考察するのだ。このような〈建築を主語にする〉という態度は、一見すると奇妙である。それは無機物の集合体である建物に人格を与えるような態度であり、あたかも、世界における自立した存在者として建物を扱うような態度だからである。現状、そのような視点からの建築論はかなり稀少だろう。「建ち方」へのまなざしは、オブジェクト指向存在論(Object-Oriented Ontology)を経由し、新たなしかたで建築を考察する可能性を秘めている。「建ち方」を建築それ自体の存在論として扱おう。簡単なことである。物事をよく見直そう。物と物の関係 / 無関係、物と人の関係 / 無関係をそのまま描こう。そこには建築家が思ってもいないような事態が、建築家たちも物・者の一つとしてはめこまれた光景がある。物質としての建築、それ自体を思考する可能性は、確かに存在している。僕たちが建物をどう捉えているか、ではない。僕たちの事情からはすっかり切り離して、〈無人の物自体〉に思考を及ばせること、だ。それは、カント以来の近現代哲学と、そこから多大な影響を受けているモダニズムの建築論一般においては、極めて困難な、いや、不可能なことになっている。しかし、「建築がどのようなしかたでそこに存在すればいいのか」という思考を巡らせたとき、僕たちは人間から見た建築の表象ではなく、物質としての建築それ自体の世界との関わりを考察している。そのとき僕たちはテクスチュアルな解釈の戯れを知らず知らずのうちに退け、相関主義をたやすく乗り越えてしまっているのだ。

＊　＊　＊

まとめよう。「建ち方」とは、建築における存在論であった。そして「建ち方」を考えるということは、建築それ自身の〈全き他者〉としての物質性を肯定し、それらの関係性をつぶさに考察することであった。そのとき僕たちは、建築と世界との関係における思考のもうひとつの次元を、開きうる地平に立っている。

＊　＊　＊

さて、「建ち方」へのまなざしということについてこれまで書いてきた。しかし今回僕たちが取り組んだのは、「建ち方」を考えるのと同時に、過去の住宅作品を再読することだった。この2つの、一見すると相容れない命題を同時に扱うということはどういうことなのだろうか。一方で特定の建物・建築家をリサーチし再読を試みながら、他方で〈外景〉としての建築のあり方を考えるということは、かなり矛盾した行為ではないだろうか。というのも、〈外景〉として建築を考えるということはつまり、建築家の設計した建物と、その隣に建つなんでもない民家を、どちらも等価な「周縁」として、まったくの同一平面上で捉えなければいけないということに他ならないからである。特殊なコンセプトで建てられた特定の建物を参照しつつ、しかしそのクリシェで終わってはいけない。あるいは、周辺の都市環境をよくリサーチしなければいけないけれど、単にコンテクストを丁寧に読み込んだだけの解答は認められない。その中庸を探り、矛盾と葛藤しながら各人が答えを見付け出す必要があった。しかも、時間が経てば環境は変わるから、その建物の周囲には、当初作家が意図していなかったものが建っていたりもして、その困難さをより際立てる。偶然に、なんの理由もなく、環境は変わる。しかし、現代建築を考える上でかなり重要な問題が、その矛盾と偶然性に潜んでいる。

＊　＊　＊

僕たちが、ある建築の空間とそこに込められたコンセプトを理解することは、たやすい。しかしそれらと高速道路を、木賃アパートを、悪趣味な成金住宅を、商業ビルを、建売住宅を、しいては郵便ポストを、同一平面上で扱うことはとても難しい。でも、必要なのだ、絶対的に。都市の中では、それらは偶然にしてなんの理由もなく、しかも必然的に、隣り合ってしまうのだから。それらは、どうしようもなく確かに、今ここに存在しているのだから。少々大げさに言えばこのとき必要になるのは、ピラミッドとミースと洗濯機を、アアルトと目の前のコップとあなたを、正倉院と自転車と中性子を、篠原一男とアルミニウムと鳥小屋を、そしてそれら全てを、等価に測ることができる物差しであり、物差しになりうる軽やかな存在論である。僕たちの提案からは、そんな物差しの断片を垣間見ることができるはずだ。少なくともそのような読みを発生させる可能性を、それぞれの提案は持っている。

[著：大村高広]

註 1= 多木浩二(2001)『生きられた家—経験と象徴』岩波書店,264pp.

Preface : Ontology of Architecture

Architecture cannot exist by itself. It is constantly subjected to the interaction with its environment, and through this process it is distorted, balanced, and finally settled in the world. "This building is in the right place" is a common phrase, but it usually refers to the relationship between the building and its surroundings, and the totality that they create together. Actually, the concept of "place" is not easy to define. Sometimes it is "placement", sometimes it is "composition". But both are only a cross section of "place". For example, let's assume a context-free location. Let's call it <Original Desert>. There is no culture, no history, no building, no light, no shadow in <Original Desert>. But even there, architecture is not allowed to exist by itself. Even if the structure is made of pillars and beams that were processed by carpenters somewhere else, or columns that were cut out from trees in a mountain, architecture is composed of materials that contain various contexts, and is a very concrete object. Architecture is a node in the complex network of industrial structure, and the result of various activities of various people. Therefore, even in <Original Desert>, as long as we admit the existence of architecture as material, we can discuss "place". "Place" is not only about "placement" or "composition". It is not a matter of how to exist, but a matter of how architecture exists.

＊　＊　＊

Speaking of ontology of architecture, Kouji Taki's "Lived House[1]" may come to your mind. But what he did was not to discuss the existence of architecture, but to discuss the existence of people through architecture. On the other hand, to discuss "place" is to discuss the existence of architecture, or the existence of city through architecture. To discuss the existence of architecture through the city, to discuss the existence of city through architecture. This kind of attitude, which makes architecture the subject, may seem strange at first glance. It is because it treats architecture, which is an inanimate object, as a character, as if it is an independent existence in the world. Currently, there are few discussions about architecture from this point of view. The attitude to discuss "place" has the potential to reconsider architecture through Object-Oriented Ontology. Let's treat "place" as ontology of architecture itself. It is easy. Let's look at things from a different angle. Let's describe the relationship between things / no relationship between things, things and people / no relationship between things and people, as they are. There are unexpected scenes in architecture, where architects and things / people are caught up in. Material architecture, architecture itself, has the possibility to be considered. It is not about how we perceive architecture, but about how we can think about <Object in Itself> without our circumstances. It is the most difficult, impossible thing in modern philosophy and modernism that have had a great influence on architecture. But, when we think about "how architecture should exist", we have to think about architecture from the point of view of <Object in Itself>, not from the point of view of human beings.

＊　＊　＊

To sum up, "place" is ontology of architecture. To discuss "place" is to affirm the materiality of architecture as <Object in Itself>, and to discuss the relationship between architecture and the world. Then we can open the other dimension of the relationship between architecture and the world.

＊　＊　＊

We have discussed about ontology of architecture. But this time, we tried to discuss "place" and to reread our past projects at the same time. What does it mean to discuss these two seemingly irrelevant propositions at the same time? On the one hand, we research specific buildings and architects, reread them, and on the other hand, we discuss the existence of architecture as <Exterior>. Isn't it a contradiction? Because to discuss architecture as <Exterior> means to treat a specific building and a common house equally, as "periphery", on the same plane. It is because we have to refer to a building designed with a special concept, but we must not end with cliché. We have to research the urban environment around the building, but we cannot accept the answer that is just based on the context. We had to find the answer by ourselves, by struggling with contradictions. Moreover, as time passes, the environment changes, and unexpected things may be built around the building, and the difficulty increases. Accidentally, for no reason, the environment changes. But, it is very important to consider architecture, and contradiction and accidentality are latent in it.

＊　＊　＊

It is easy to understand the concept of a space and the concept that is contained in it. But it is very difficult to treat a high-speed road, a cheap apartment, a vulgar mansion, a commercial building, a ready-built house, and even a mailbox on the same plane. But it is necessary, absolutely. In the city, they are accidental and unreasonable, but they are inevitably next to each other. They exist here, no matter what. To be a little exaggerated, at this moment we need a measure that can measure pyramids, mies, washing machines, aalto, a cup in front of us, you, shosoin, bicycles, neutrons, shinohara kazuo, aluminum, chicken coops, and all of them equally. It is a measure that can be a material measure, and a light ontology that can be a material measure. Our proposals have the fragments of such measures. We hope that they have the possibility to generate such readings.

[Author : Takahiro Omura]

1= Kouji Taki (2001) "Lived House - Experience and Symbol" Iwanami Shoten, 264pp.

住宅作品集 19XX → 2015

Chapter 2 : Collection of works 01-07



Photo by 東孝光（1982）『別冊新建築 1982日本現代建築スペシャル』（東孝光）新建築社 p.83

東孝光氏による〈一連の都市型住宅〉の全字塔作品「塔の家」

都市型住宅（Urban Housing）：都市型住宅とは、めまぐるしく変化を続ける都市の中で、ひしめき建っている家と家の間でしなやかに暮らす、そのための住宅。都市型住宅は、ベッドタウンのような、都市近郊の住宅用造成地につくられるものではなく、すでに住宅ができあがり、密集した市街地に建てられるものを指す。現代において土地はすでに細かく区画整理されており、それ以上に広げることは難しい状態である。しかしながら、時代は刻々と移り変わり、家族形態や生活様式も大きく変化している。つまり、家族の入れ物である住宅が、それに対応できなくなってきているのである。そこで新しく家を建て替えようとするわけだが、今までのような方法では大きな改築は難しい。土地が持つコンテクストを最大限に使い、例えば住宅本来のもつ諸室の形式さえ組み換え、新しい空間をつくる。今までの土地上に、今までとは異なる視点で、今までとはまったく異なる新しい住宅を建てようという試みが、過去から現代に至るまで繰り返しなされているのである。

ここで、建築家や建築学科の学生に「都市型住宅」と尋ねてまず名前が挙がるのが、建築家「東孝光」氏の自邸「塔の家」である。東京青山のキラー通りに林立する商業ビルに挟まれるように建つ太い柱のような建物だ。この住宅は、1966年に竣工し、建築面積3.6坪という住宅とは思えない構築に誰しもが驚愕した。都市に住み続けることにこだわった住宅版〈小さな巨人〉は、都市構造が激変した現在、外充のビル群に埋もれるようにひっそりと佇んでいる。コンクリート打放しの粗仕上げが風格さえ漂わせるその風貌は、都市型住宅の教科書としてリスペクトされ続けている。

DESIGN / PLANNING

1

Photo by 奥佳弥 (2009)『リートフェルトの建築』TOTO出版 p.45　二階居間、食堂から棟梁をみる

シュレーダー邸 / リートフェルト

1924

Schroder House, Gerrit Thomas Rietveld, 1924 | Utrecht, Netherlands



Photo by 奥佳弥 (2009)『リートフェルトの建築』TOTO出版 pp.28-29

名称	：Schroder House
設計	：Gerrit Thomas Rietveld
住所	：Utrecht , Netherlands
竣工	：1924
構造	：混構造
階数	：地上二階建
敷地面積	：247.1m²
建築面積	：94.7m²
延床面積	：172.2m²
建蔽率	：38.0%（許容 - %）
容積率	：69.6%（許容 - %）
用途地域	：-

我々は専ら基本的な形態、単純な空間、基本色を使用した。なぜならそれは大変根本的であり、かつそれらはあらゆる連想にとらわれないからである。（シュレーダー邸のデザインについて）

その構成はそれぞれの部材がどれ一つとっても他を支配することなく、かといってまた他に従属することのないように調律される。こうして椅子の全体が空間の中に自由に明快に組み立てられ、形態が素材から生まれ、立ち上がる。（椅子のデザインについて）

奥佳弥「シュレーダー邸、1924年 ―家具から建築へ」(1998)『デ・スティル 1917-1932』河出書房新社 pp.126-129

[G.T.Rietveld]



No.01 シュレーダー邸

國分元太
Genta Kokubu

所属　：山名研究室
対象敷地：前面道路向正面
敷地面積：266.5m²
建築面積：108.8m²
延床面積：197.5m²
建蔽率　：40.8%（許容 - %）
容積率　：74.1%（許容 - %）

題名 / Title

01 シュレーダー邸（Gerrit Thomas Rietveld）

『 chair lying in house 』

— しゅレーダー邸
Shu-roder House

コンセプト / Concept

「シュレーダー邸」は、その時代の芸術運動である『デ・ステイル』と関連し多くの見方がなされてきた。

本設計では、その数多の観点の中から、〈家具の制作手法が住宅に展開した〉ことのみに着目し、その設計過程をトレースすることによって、ユトレヒト郊外の閑静な街並みに対して過激な「建ち方」をするこの住宅に対峙できる、ある種の〈異様さ〉をもった住宅を設計することが目的であった。

即ち、まず椅子を設計し、そのコンセプトを住宅に展開するという設計手法をとった。リートフェルトの椅子が、「座る」という人間のひとつの姿勢に対し合目的に作られているとするならば、いくつかの姿勢が組み合わされてできるような多様さをもった椅子があるだろうと仮定し、３つの椅子を設計した。これらの椅子が人間の姿勢と幾何学によって生成されたように、住宅の外形は諸室とそれを組み合わせた際に浮き上がるいくつもの規整線によって決定されていく。そうして建ち上がったこの住宅は、「シュレーダー邸」のそれと異なる印象の〈異様さ〉を備え、ユトレヒトの郊外に佇むことになるだろう。

審査講評 / Review

「シュレーダー邸」は外観上の幾何学的構成と内部の可動間仕切りで有名であるが、実物を見に行くと伝統的な連続型タウンハウスの妻側端部に位置していることに気づく。さらに周辺の歴史を追うと、この住宅が既存の住宅街を背にして田園風景に向かって開放的に建っていることがわかる。新たな住宅の提案では、建築と家具との包含関係をひっくり返すことで、〈異様な外景〉を創出していることに成功しているが、外形が反転する室内においても、より身体的な空間構成が構築されているとよいだろう。



i .) リートフェルトは、「シュレーダー邸」の設計を依頼される 1923 年[注1)]までは家具デザイナーとして作品を制作していた。その家具にみられる特徴的な部材の接合法―直交する垂直材と水平材が互いに接しながら、軸方向に突き抜ける構法[注2)]―は「シュレーダー邸」にも展開しており、その周囲の住宅と完全に異なる作られ方が、街並みに対して〈異質さ〉を放つ要因であるといえる。

ii .) 敷地はユトレヒト郊外にある。1964 年に目の前に高速道路が建設される[注3)]までは、敷地東側には田園風景が広がっていた。リートフェルトはその風景に開くように開放的な窓を二階の隅に備えた。また、住宅のプランは機能性が重視され階段を中心としたシンプルな構成に、二階は可動式間仕切りで空間を変化させることを提案した。このことからわかるように、自身の家具制作から連続した構成手法を持ち込むと同時に、敷地のコンテクストや住機能を充分配慮し設計を行っていた。

iii .) このリートフェルトの設計過程〈まず椅子を設計し、そのコンセプトを住宅に展開する〉をトレースすることによって、ユトレヒト郊外の閑静な街並みに対して過激な「建ち方」をするこの住宅に対峙できる、ある種の〈異様さ〉をもった住宅を設計することができると考えた。

iv , v .) リートフェルトの椅子が人間の「座る」というひとつの姿勢に対して作られているならば、それに対していくつかの姿勢が組み合わさってできるような形態の椅子を考えた。まず、円弧という幾何学に沿って人間の「座る」「寝る」などの姿勢をスケッチした。その中から 2 つ姿勢を選び、重ねあわせたときの残余を円弧の曲線を頼りにマッスとして出現させていくという手法で、3 つの椅子を設計した。これよって、1 つの形態から人間の 2 つの姿勢に対し身体的にフィットする椅子が得られた。この〈身体的な規整線の重なりによってマッスを表出させる〉手法を住宅の設計へと展開する。

注1, 注2= 奥佳弥「シュレーダー邸、1924 年 一家具から建築へ」(1998)『デ・スティル 1917-1932』河出書房新社, pp.126-129 注3) 奥佳弥 (2009)『リートフェルトの建築』TOTO 出版, p.33
図版出典 :fig1= 筆者撮影 2014/3 fig2=google maps を基に作成 fig3= 筆者撮影 2014/3

i .) Time Line

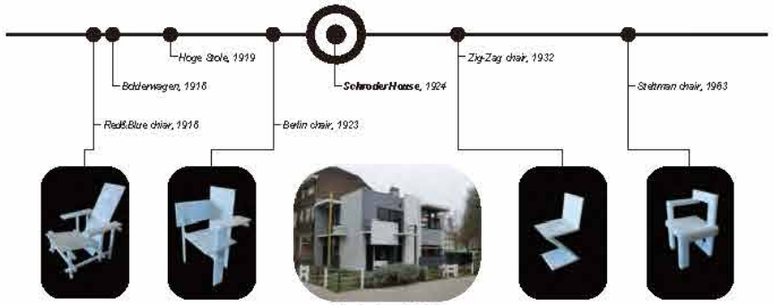


fig1. シュレーダー邸

ii .) Analysis : Target + Site

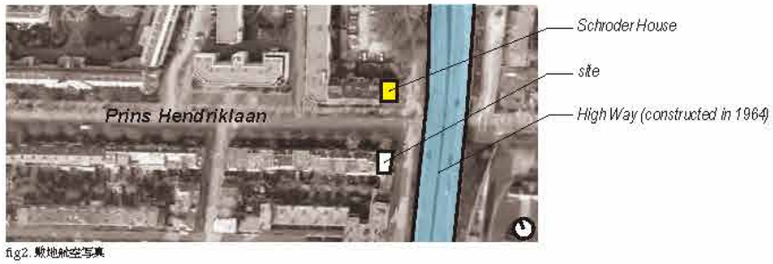


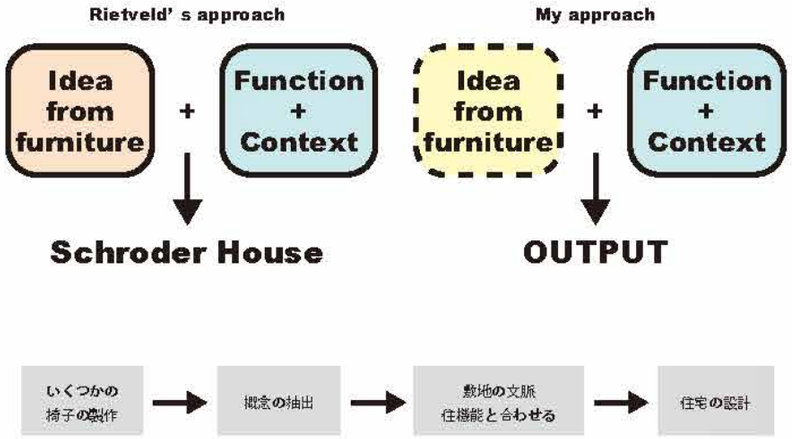
fig2. 敷地航空写真

fig3. 二階隅の窓

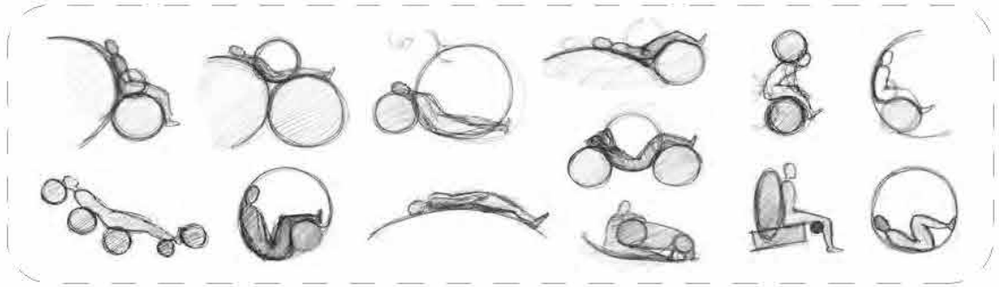
周囲と異なるスケール
周囲と異なる作られ方
↓
街並みに対する
「異質なもの」としての存在

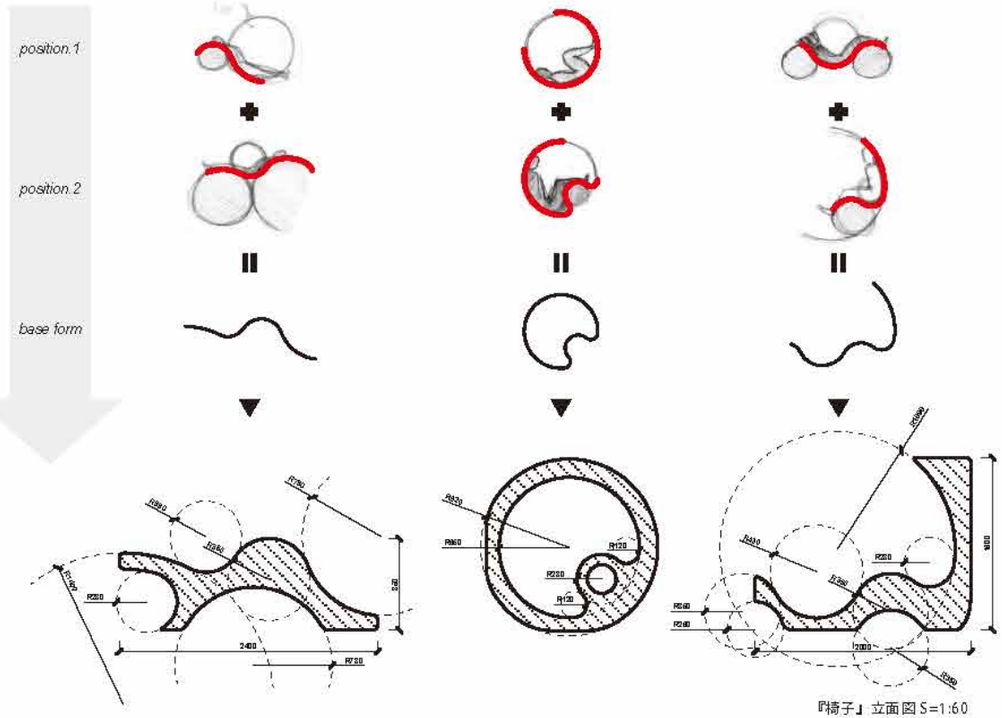
田園風景へと開いた開口
シンプルで機能的な平面
↓
敷地のコンテクスト
住機能は考慮している

iii .) Approach



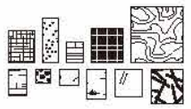
iv.) Chair

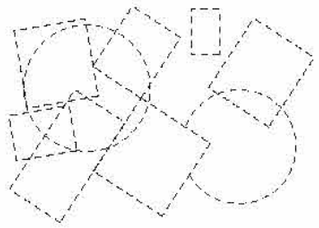


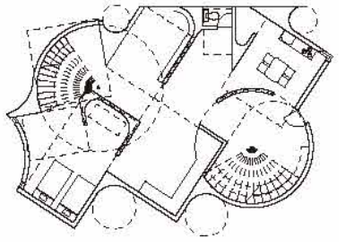


『椅子』立面図 S=1:60

v.) House



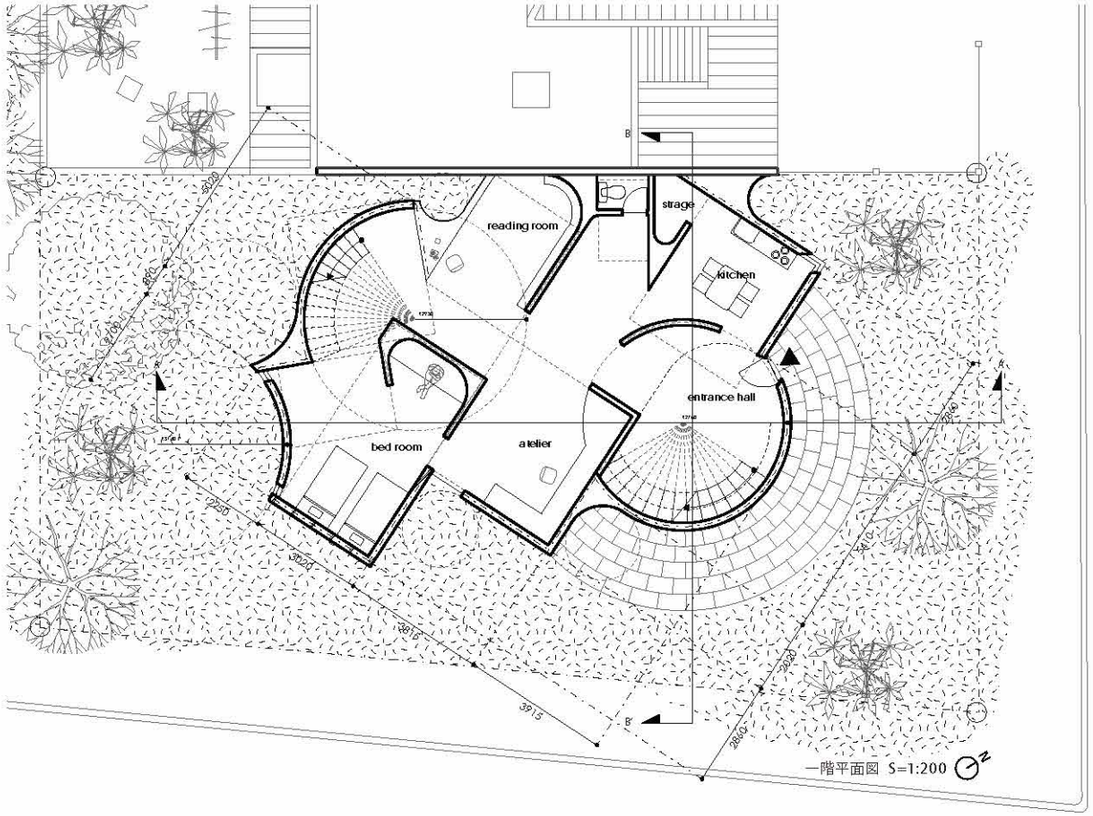




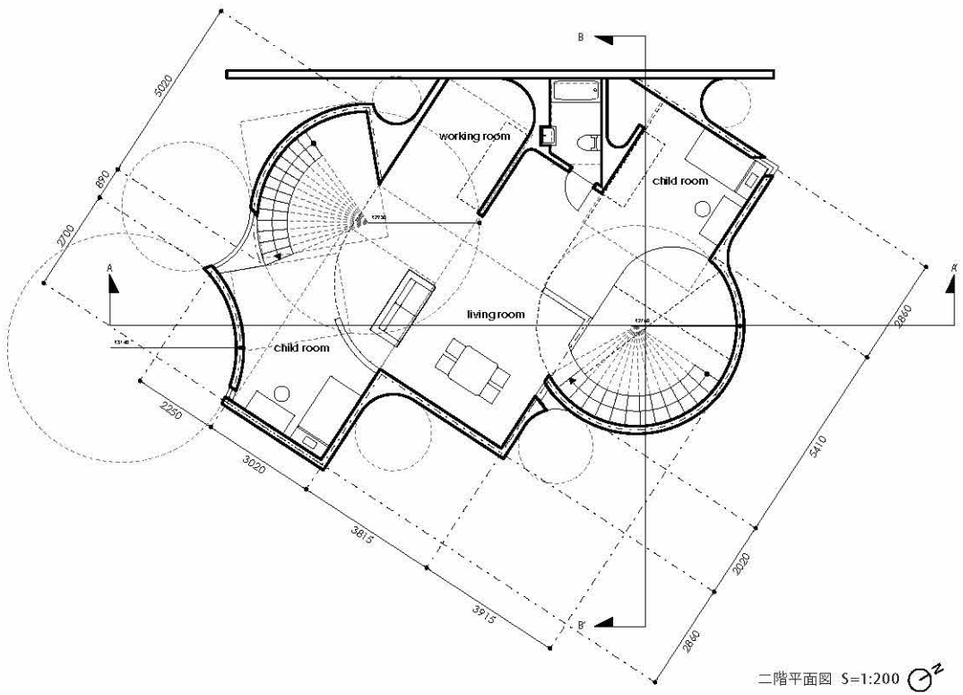
Phase1. 室面積の決定
シュレーダー邸の室面積を参考に、諸室の面積を決定。

Phase2. 規整線の決定
室を斜めに振ることで、窓をとった隣に 2 面接道の敷地においてもプライバシーを確保することが可能。

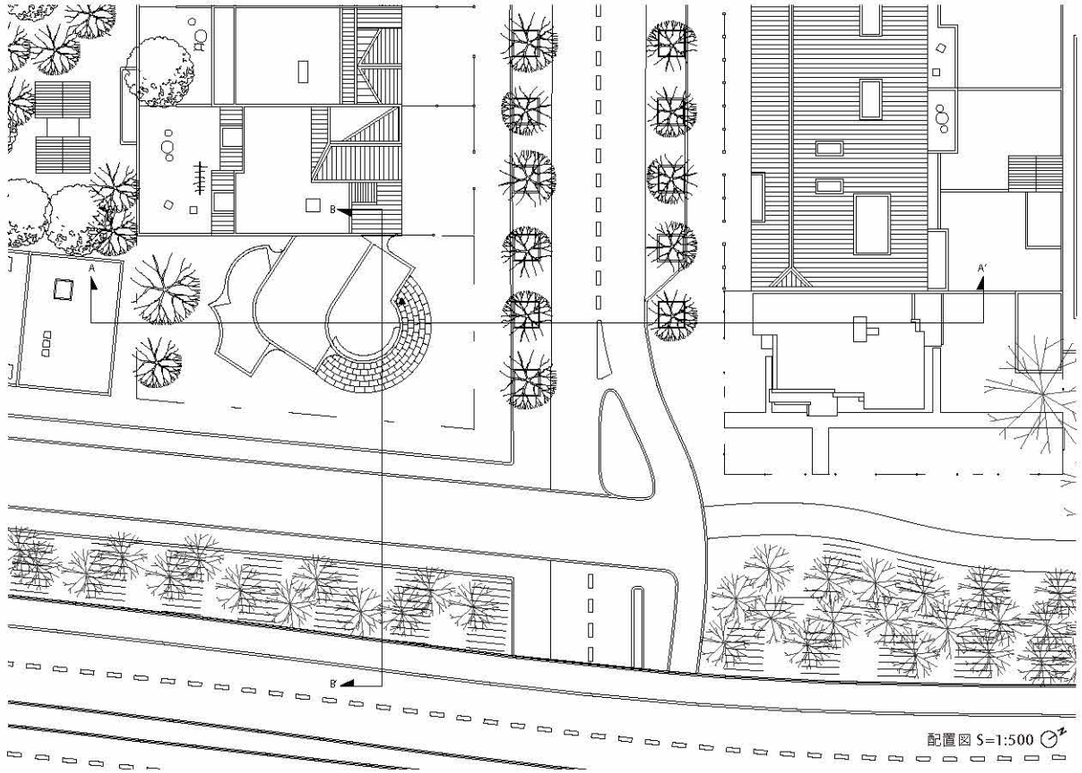
Phase3. 外壁・内壁の決定
重複する規整線の残余や重なった部分を壁面としていく。間仕切り壁も同じ考え方で決定する。



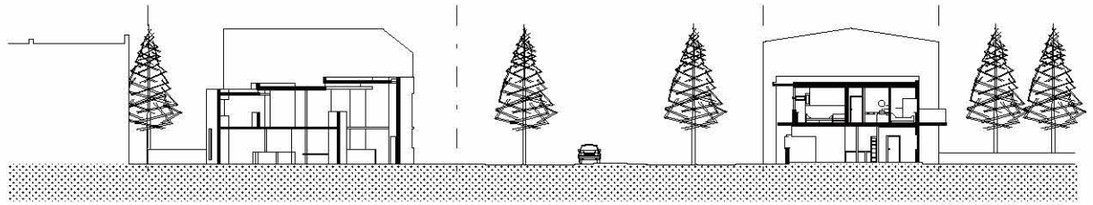
一階平面図 S=1:200



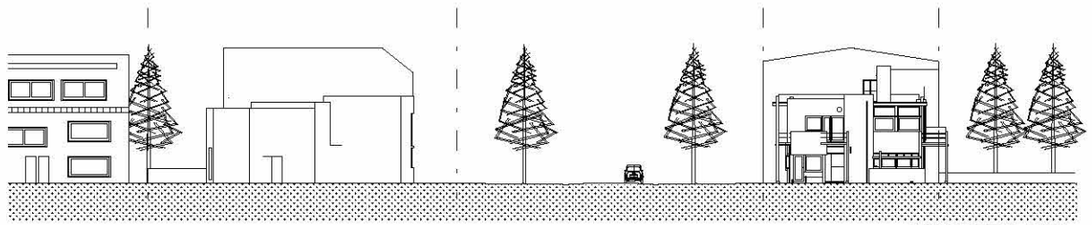
二階平面図 S=1:200



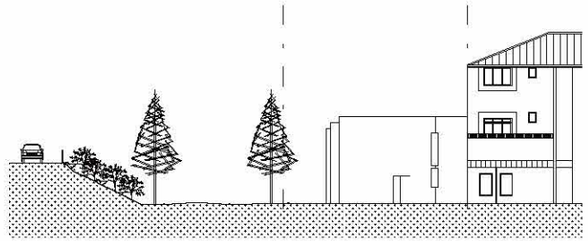
配置図 S=1:500



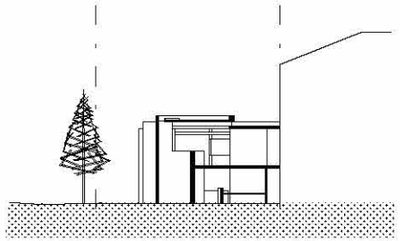
A-A′ 断面図 S=1:500



南東側立面図 S=1:500



北東側立面図 S=1:500

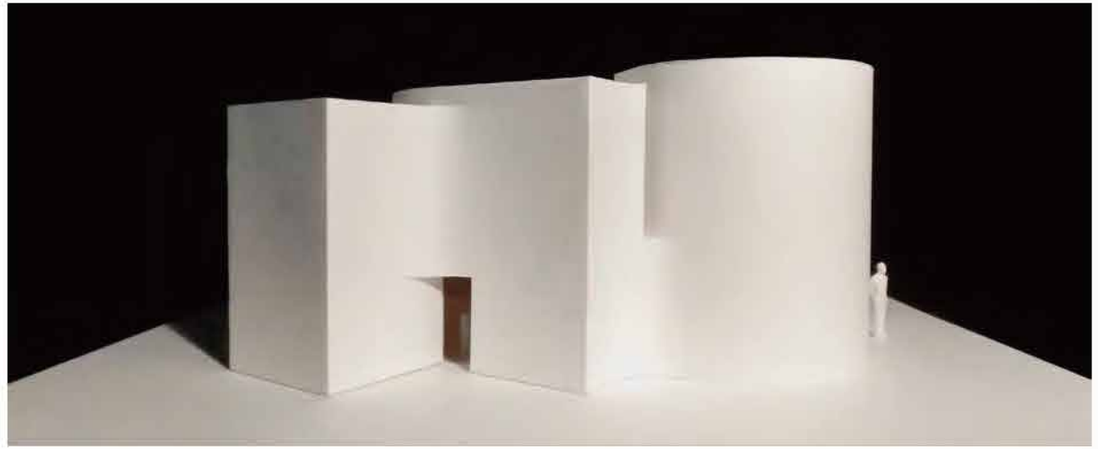


B-B′ 断面図 S=1:500

01

シュレーター邸（Gerdt Thomas Rietveld）

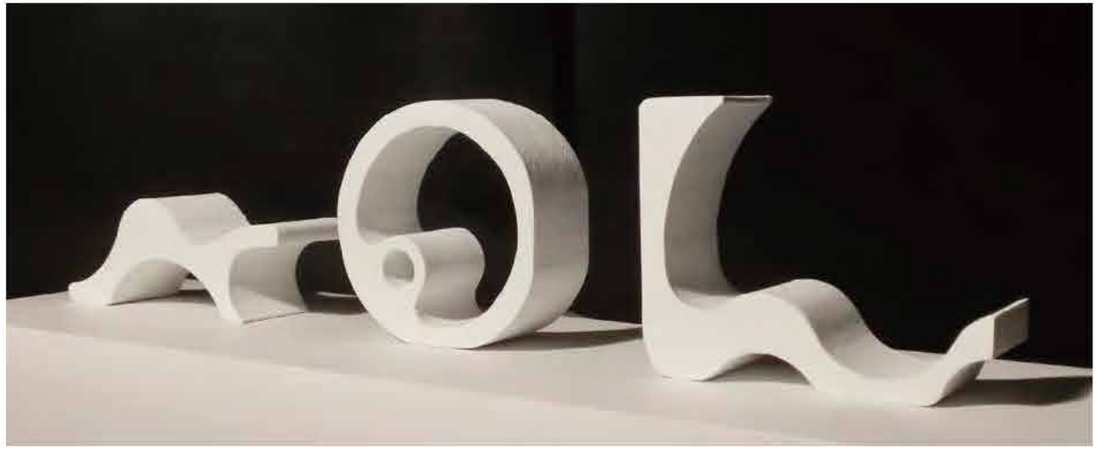
















2



Photo by 建築家山田守展実行委員会（2006）『建築家山田守作品集』東海大学出版会 p.120　二階玄関ホールから螺旋階段をみる

山田守邸 / 山田守 1959

Yamada Residence, Mamoru Yamada, 1959 | Minato-ku, Tokyo



Photo & Text by 建築家山田守展実行委員会（2006）『建築家山田守作品集』東海大学出版会 p.118,126

名称	：山田守邸
設計	：山田守
住所	：東京都港区南青山
竣工	：1959
構造	：RCラーメン構造
階数	：地上三階建
敷地面積	：370.0m²
建築面積	：143.7m²
延床面積	：417.6m²
建蔽率	：38.8%（許容 60%）
容積率	：112.9%（許容 300%）
用途地域	：第二種中高層住居専用地域

自分はどういうものか自分の家を造る気にはなれなかった。一度本当の家に住み度いと伝う老妻の希望もあり、65歳にして初めて止むを得ず本当の家を建てることになった。私の家は単に憩いの家ではなく、一階・三階は働くための場所であり、二階が普通の家族住宅である。都内に住宅を持つことは必ずしも良くないが、ここは住宅専用地域であって都心に関係の多い仕事を持った人が住むところではある。不燃立体化と美しい環境を造ることに協力する様な家を造って置けば、将来も何かに利用されるであろう。

[山田守]



No.02 山田守邸

外川喜裕
Yoshihiro Togawa

所属　：岩岡研究室
対象敷地：西側隣地
敷地面積：267.0m²
建築面積：86.1m²
延床面積：345.4m²
建蔽率　：31.9%（許容60%）
容積率　：129.4%（許容300%）

題名 / Title

『都市での装い』

Clothes of the city

— あるまじろん
Armadillon

コンセプト / Concept

「山田守邸」が竣工された1959年から街は劇的に変化した。青山の一等地で今も「山田守邸」は人々に愛され続けている。

〈一階にある喫茶店の絡まる蔦や茂った庭、空缶に入った珈琲豆の匂い。マスターと談笑する馴染み客。靴を脱ぎ、印象的な螺旋階段をのぼる二階のギャラリーは庭を緩やかに包み、包まれ、生け花や着物の展示が和室と好く馴染む。〉

いつ訪れても、この自邸の周りは〝青山〟〝表参道〟とは違った活気をもっているように感じる。

山田守はどのようにしてこの空間を創り出したのか。これはどうして今も尚、敬愛される建物であるのか。この「山田守邸」を分析・観察していく中で、その所以をさぐり、隣地にそれを省み、発展させることで、設計を進めていく。

審査講評 / Review

「山田守邸」は自身のアイコンでもあるY型の建物配置と水平ラインを強調した外観、そして居住空間とアトリエ空間を立体的に併存させるための二重の動線構成が特徴的な住宅である。新たな住宅では、これらの特徴すべてを継承する形で丁寧に設計されており、山田自身がデザインした築山状の小さな庭園を挟む奥の敷地を使って、二重階段を内包したギャラリー付きの併用住宅を提案している。建物全体が細長いヴォリュームとしたために空間構成が単調となっているので、もうひと工夫が必要であろう。



ⅰ.) Analysis —Surrounding environment

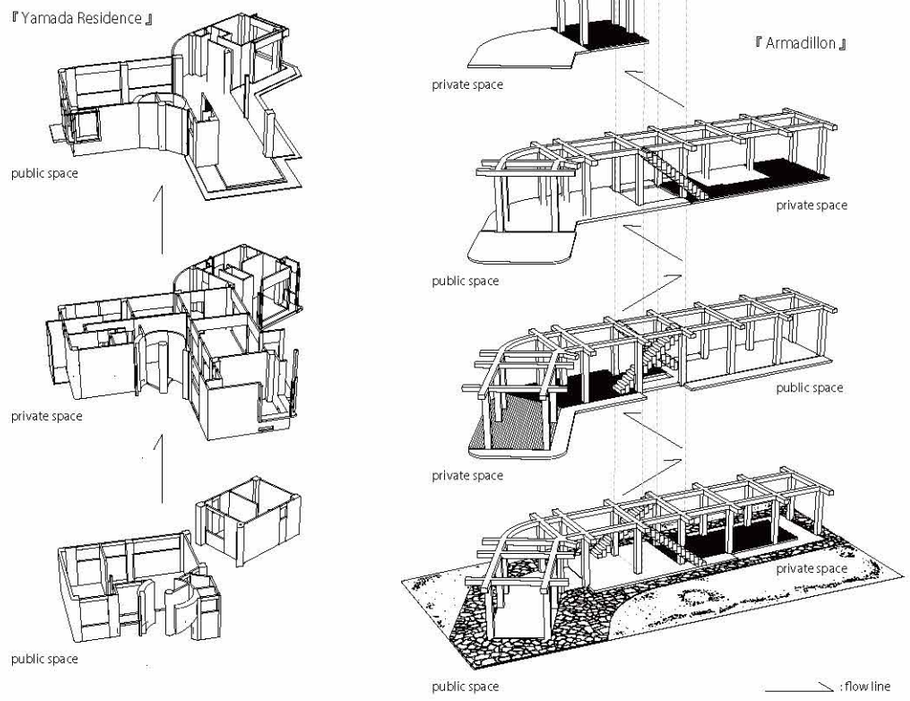
「山田守邸」周辺は第二種中高層住居専用地域に該当し、この「山田守邸」が接する道路は明治通りや青山通りの景観とは異なった様相をもつ。中でも自邸周辺は高さのある建物がなく、自邸の庭の木々が鬱蒼とした感じがとても魅力的である。そして、それは「山田守邸」の「建ち方」が玄関アプローチと庭に分割していることで創り出されている。この敷地に対しての自由が豊かな緑を生み、そして、それが山田守が求める〈自然と調和した住居環境〉が成立している。



配置図 S= 1:1000

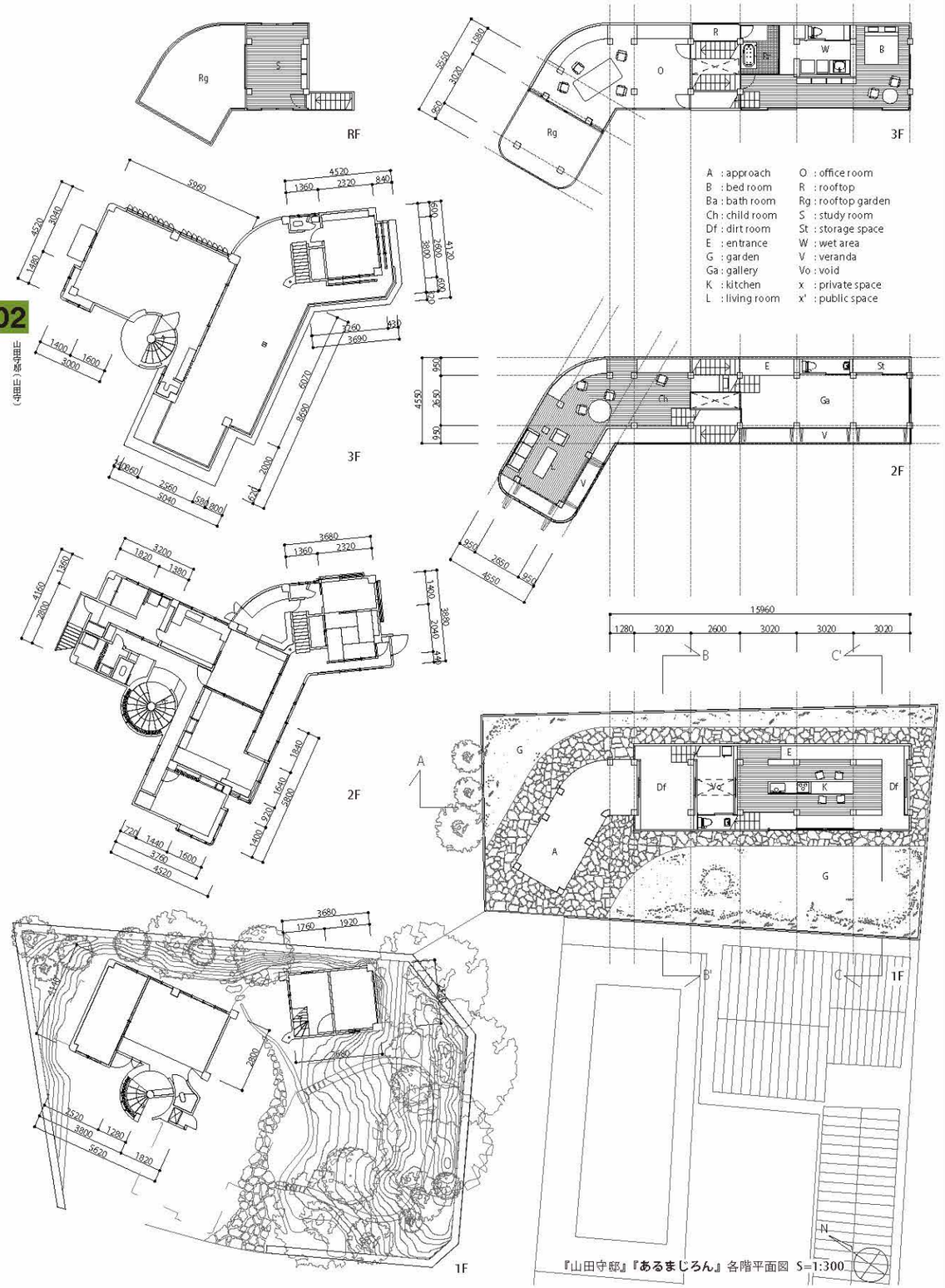
ⅱ.) Spatial Composition

「山田守邸」は竣工当時、上記のように公的空間で私的空間を挟んでいる。この独特の計画は現在、一階はカフェ（公的）、二階はギャラリー（公的）、三階は住居（私的）となっている。今回の設計では上記のことを踏まえ、交差する二つの階段により私的空間と公的空間を階層ごと交互に配置するように動線配置を組んでいる。

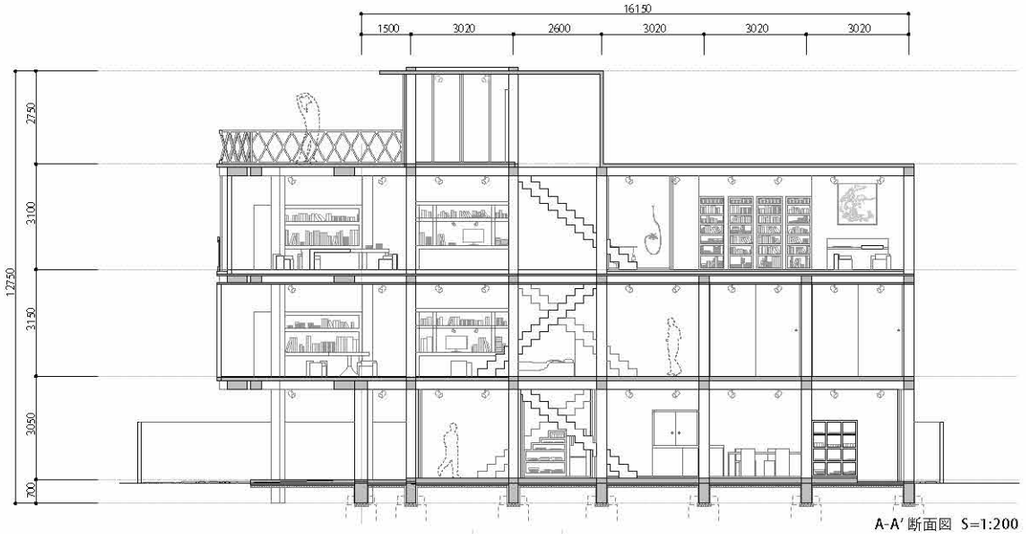




広域配置図 S=1:5000



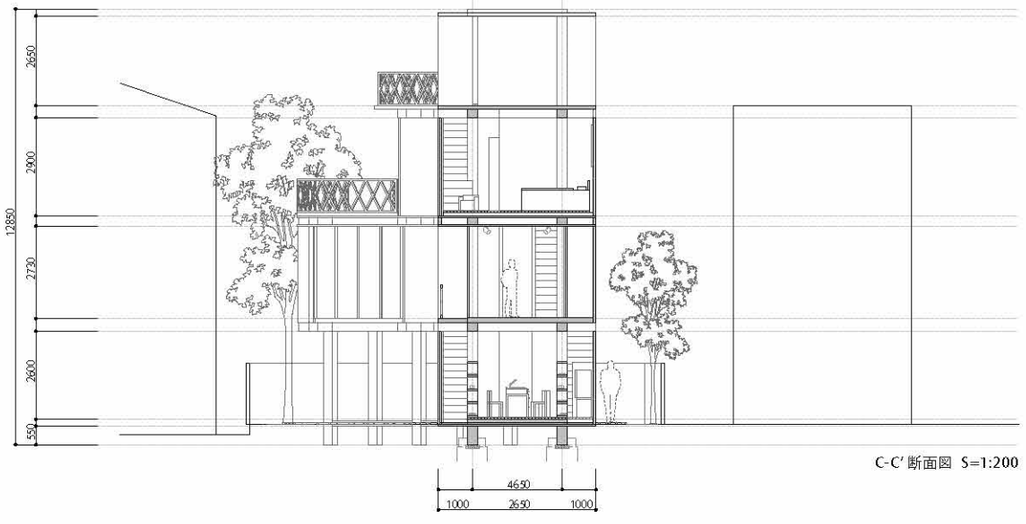
『山田守邸』『あるまじろん』各階平面図 S=1:300



A-A' 断面図 S=1:200



B-B' 断面図 S=1:200



C-C' 断面図 S=1:200







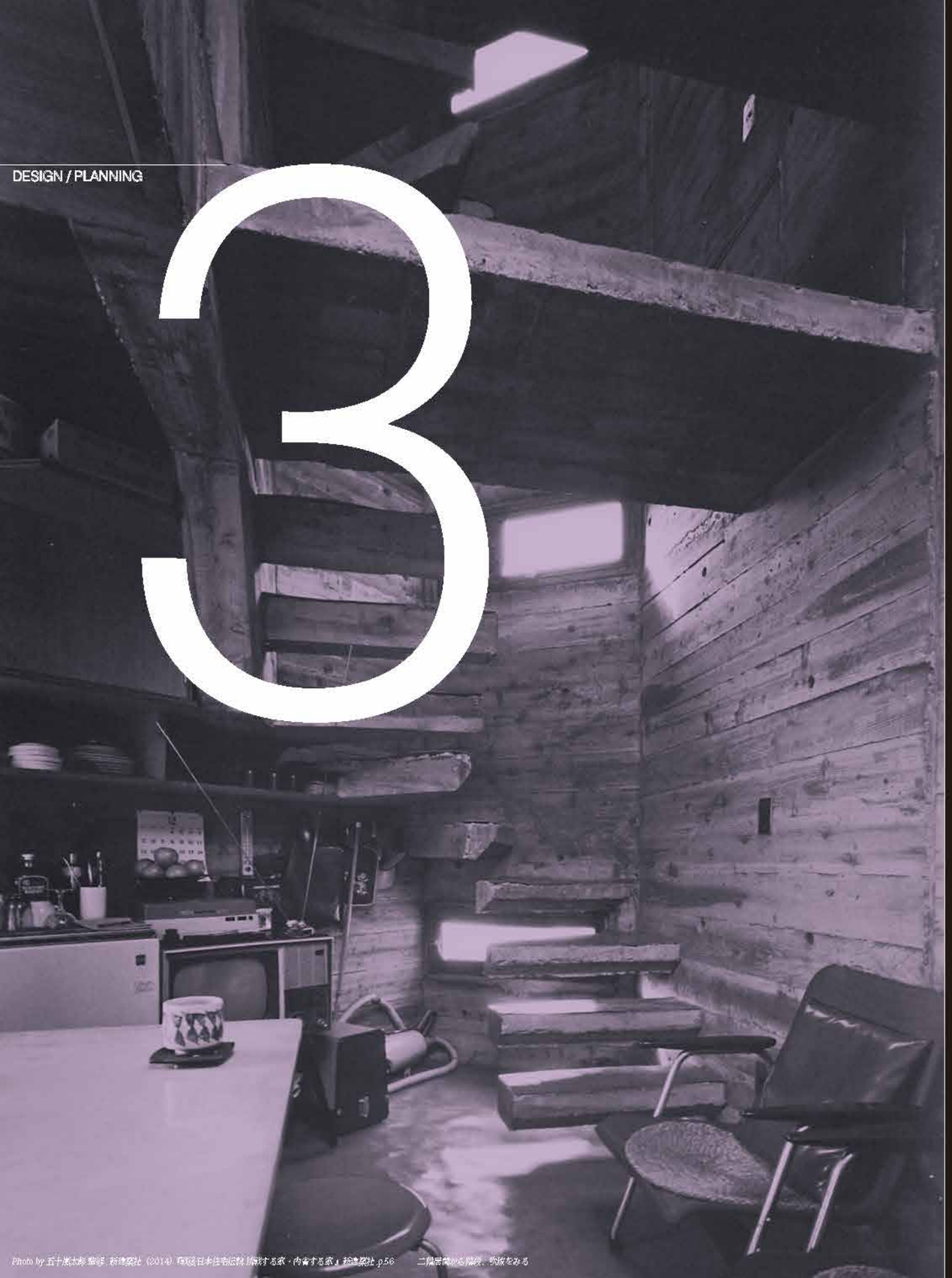












DESIGN / PLANNING

3

Photo by 五十嵐太郎 監修 新建築社（2014）『戦後日本住宅伝説 挑戦する家・内省する家』新建築社 p.56　二階居間から階段、吹抜をみる

塔の家 / 東孝光 1966

Tower House, Takamitsu Azuma, 1966 | Sibuya-ku, Tokyo



Photo & Text by 東孝光（1982）『別冊新建築 日本現代建築家シリーズ⑥ 東孝光』新建築社 p.62,63

名称	：塔の家
設計	：東孝光
住所	：東京都渋谷区神宮前
竣工	：1966
構造	：壁式 RC 造
階数	：地下一階地上五階建
敷地面積	：20.6m²
建築面積	：11.8m²
延床面積	：65.1m²
建蔽率	：57.4%（許容 60%）
容積率	：316.4%（許容 400%）
用途地域	：住居地域（竣工当時）

まずこれをつくって仕事を始めた、私の最初の作品だ。その後の私の進路に深く関わっている。内外ともコンクリート打放し、床にビニールシートを置いただけの、質素で極度に単純化された住居であるが、レベル差・吹抜け・ワンルーム・屋根裏部屋・地下室など、それまでの日本の住宅では強く意識されなかった都市型住居のための独自の手法の先駆けがそこにあると思う。また、都市の外部空間への関心も払い、地上より一段高くなった玄関ポーチが、建築と一体化した囲い壁や飛び梁によって高い空間性を獲得している。

［東孝光］



No.03 塔の家

齊藤誠司
Seiji Saito

所属　：安原研究室
対象敷地：前面道路向正面
敷地面積：36.1m²
建築面積：32.6m²
延床面積：149.1m²
建蔽率　：90.3%（緩和許容100%）
容積率　：353.6%（許容400%）

03
塔の家（齊藤花）

題名 / Title

『時をつなぐ家』
House that links the time

—木塔の家
Wooden Tower House

コンセプト / Concept

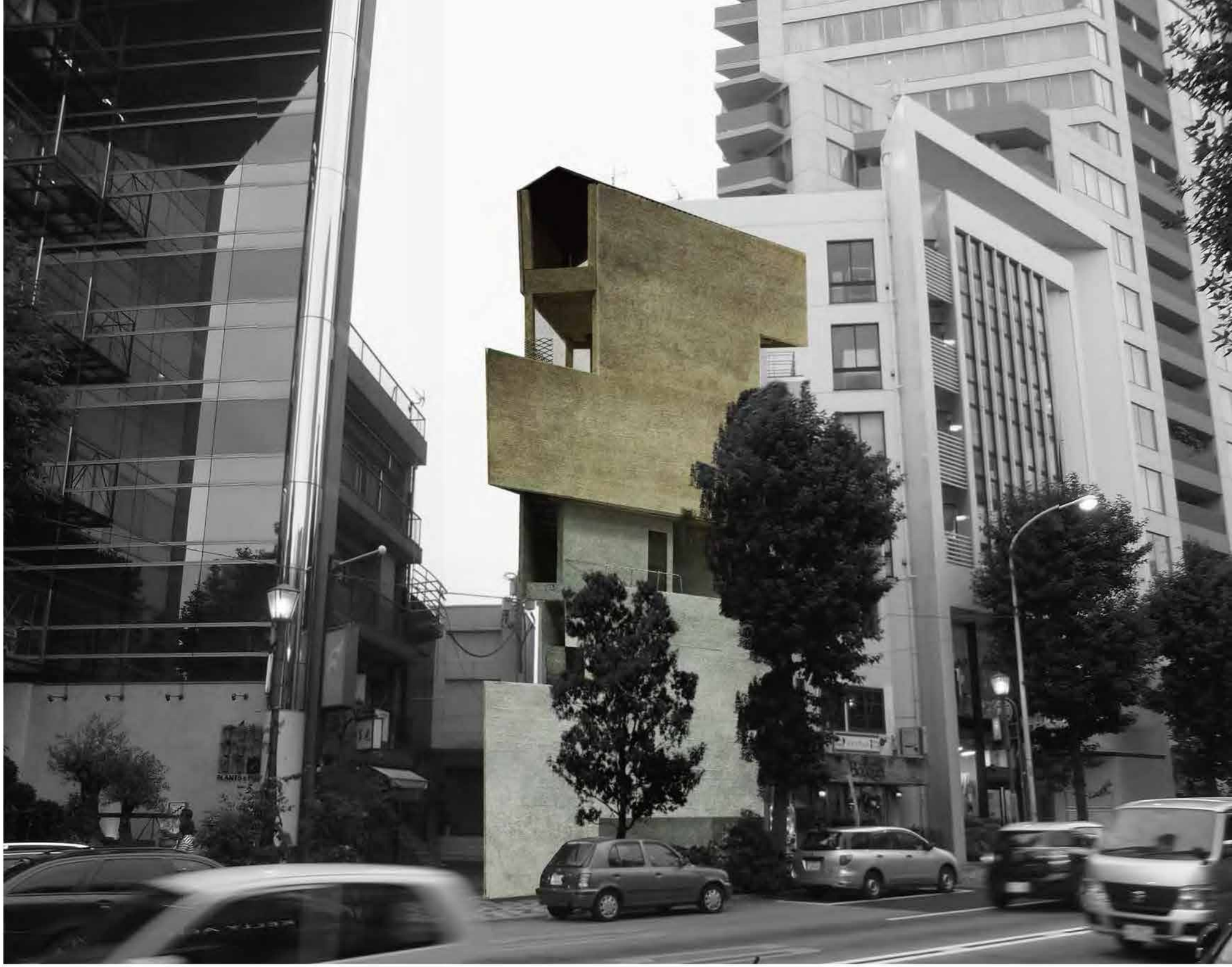
個人の所有物である家が一つの世界であるのに対して、東京という街は人々の欲望・願望が渦巻く混沌とした世界である。そのため、時代の情勢・価値観に基づいて、街はその姿を劇的に変化させている。

敷地のある神宮前３丁目は、かつて木造住宅地域であり、現在は鉄骨やRCによる高層で無機質な建物が林立し、将来的には木質化が進むと言われている。「塔の家」と街との関係を遡って見ると、時代と周囲の変化に対して、「塔の家」は果たす意味を変えながら、常に街並みに寄与してきたことがわかる。このような「塔の家」を「時をかける家」と言ってもいいだろう。しかし、街並みは歴史の上書きを繰り返し、以前の街並みはほとんど残らず一時代的なものとなっている。

本提案は、時を感じられない現状に対し、街並みに時の断片を埋め込み、都市体験へと還元できないかと考えた。つまり、私が提案するものは「時をつなぐ家」であり、この住宅が街並みの変遷を映す鏡としてこれからの街並みを形作っていくと考える。

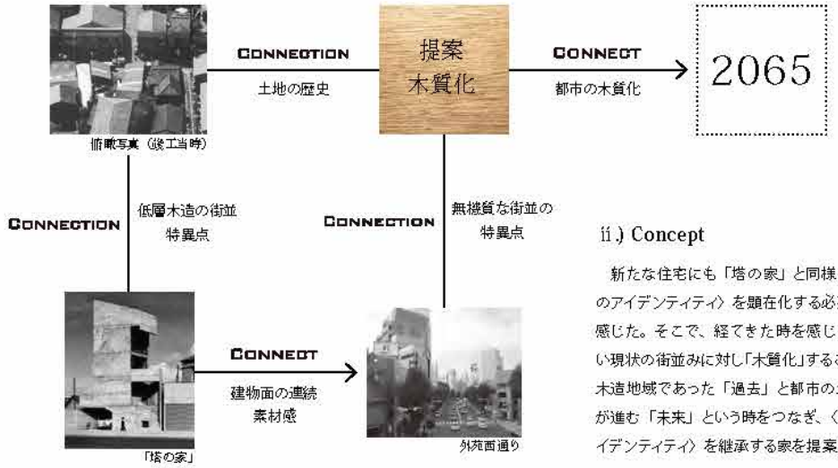
審査講評 / Review

塔の家は東京都心の三角形の狭小敷地に現存する著名な都市住宅であるが、街路を挟んで斜向いに相似形の三角敷地が存在していることはあまり知られていない。新たな住宅の提案では、「塔の家」が単に狭小住宅の象徴ということだけではなく、東京の都市計画の歴史が刻まれていることに着目して、都市が木質化へと向かう現在を象徴するような住宅となっている。四階までをRC、その上の三層分を木質構造とする外観の表現は魅力的だが、フットプリントがミニマムな建物の立体構成に新たな提案が欲しかった。



i.) Analysis —History of cityscape

様々な要素が混在する敷地に対して多角的に調査を行う。土地の歴史 fig1) を追うことで斜向かいに同様の経緯で生まれた双子敷地 fig2) があることを発見し、本提案の敷地とした。また、街並みを構成する素材の調査では、用途地域の変遷 fig3) により敷地周辺は主に無機物のファサードで構成され、かつての木造地域の名残は失われてしまっている。現状だけでなく過去を洗い直すことで、「塔の家」は街並みの中での意味を変化 fig4) させながら存在しており、〈街のアイデンティティ〉をつなぐ希少な存在になっている。

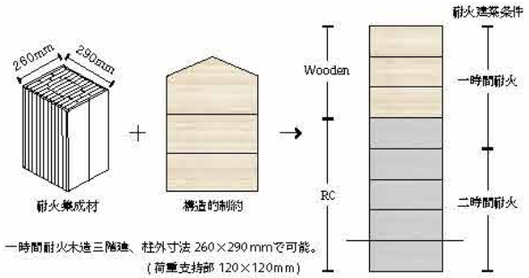


ii.) Concept

新たな住宅にも「塔の家」と同様に〈街のアイデンティティ〉を顕在化する必要性を感じた。そこで、経てきた時を感じられない現状の街並みに対し「木質化」することで、木造地域であった「過去」と都市の木質化が進む「未来」という時をつなぎ、〈街のアイデンティティ〉を継承する家を提案する。

iii.) R.C+Wood / Fireproof building

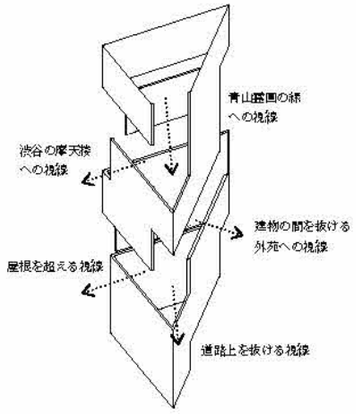
耐火建築の条件と構造的制約から四層以下を RC 壁式構造、五層以上を耐火集成材による木造軸組構造とする。RC 部は恒久的なシェルターとして、木造部は生活に合わせ変化する可変性を持つ。営みの変化が建築に現れ、街に人間味のある表情をもたらす。

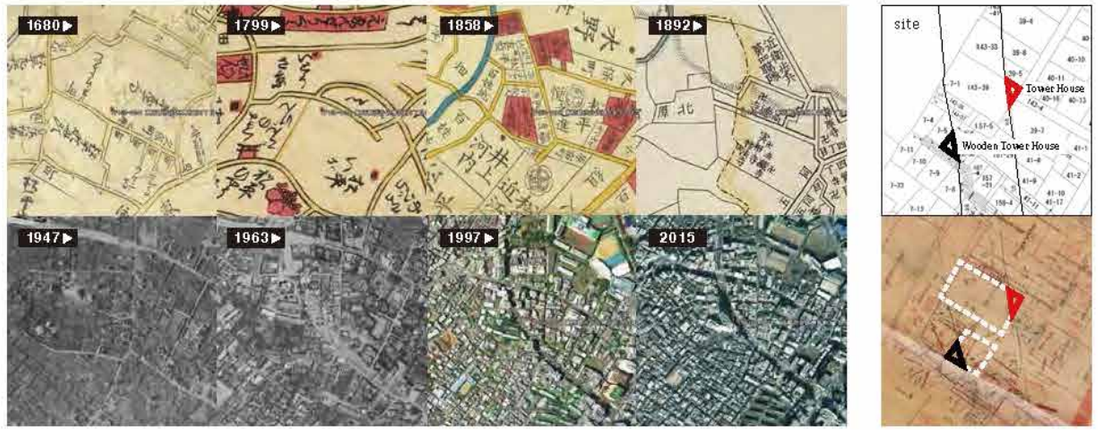


一時間耐火木造三階建、柱外寸法 260×290mmで可能。
（荷重支持部 120×120mm）

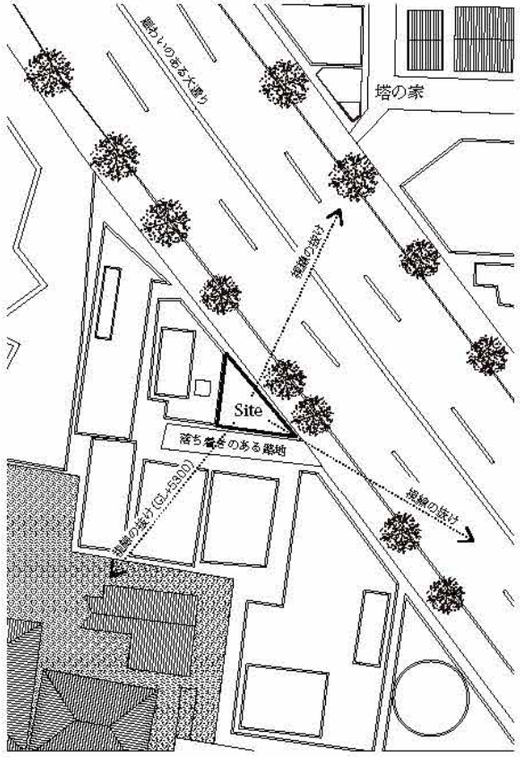
iv.) Structure / Vista

周辺環境から螺旋状とする。垂直移動とともに異なる空間性と外部との関係が展開 fig5) されるように計画する。開口の先には街を構成するランドマークが見え、生活に都市の情景が織り込まれる。











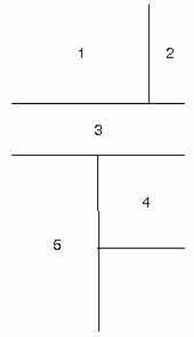


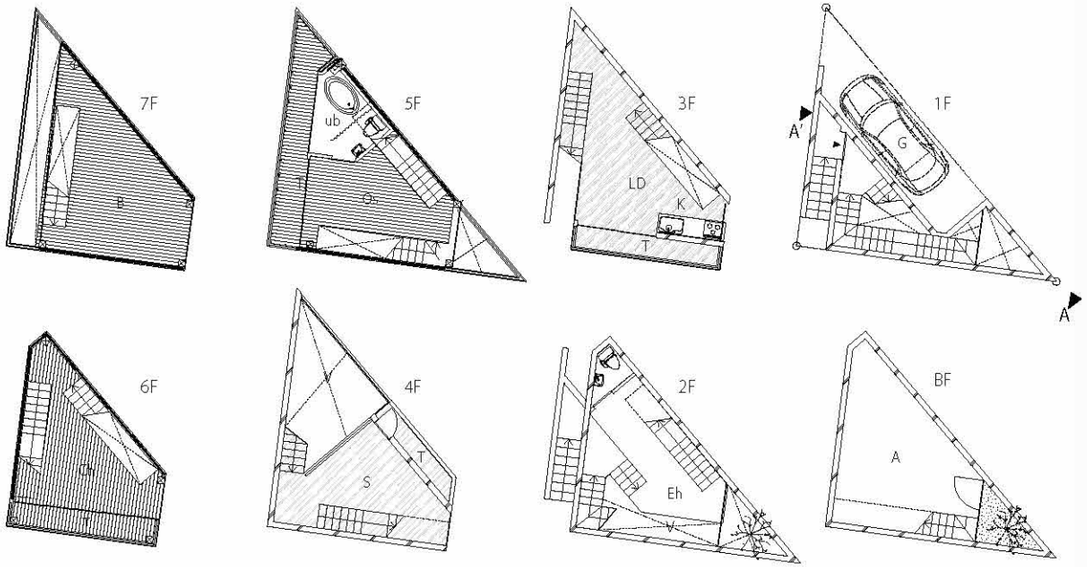
fig1＝神宮前 3 丁目の歴史。大きな変化は 1963 年から現れる外苑西通りで、「塔の家」の敷地はこの開発による変形地である。
*google mapsを基に作成

fig2 =「塔の家」の斜向かいに同様の経緯で生まれた土地がある。ここを敷地とする。
*『法14条地図』東京法務局

fig3＝用途地域の変遷。敷地の用途は 50 年の間に住居地域から近隣商業地域に変化しており、その結果、木造低層から高層でファサード面が揃った街並みに変化している。
*『渋谷区都市計画図』渋谷区都市計画部都市計画部
〈https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kurashi/machi/toshi_sodan.html〉

fig4＝竣工当時はランドマークとして、（左）
現在は全体の街並みに馴染んでいる。（右）
*左：東孝光(1988)『塔の家』白書』住まいの図書館出版局,p.105
*右：筆者撮影2015/10

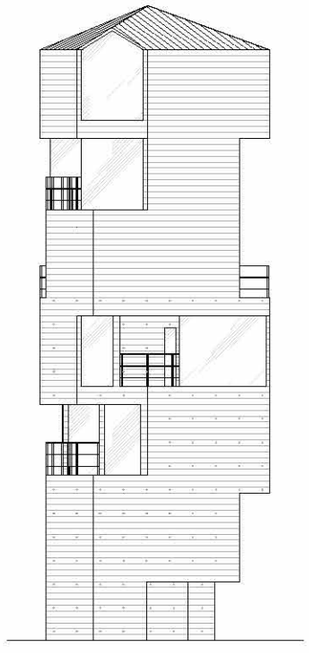
fig5＝敷地環境の調査。二面の前面道路は性格が異なり、高さと方向により印象の異なる風景が広がる。



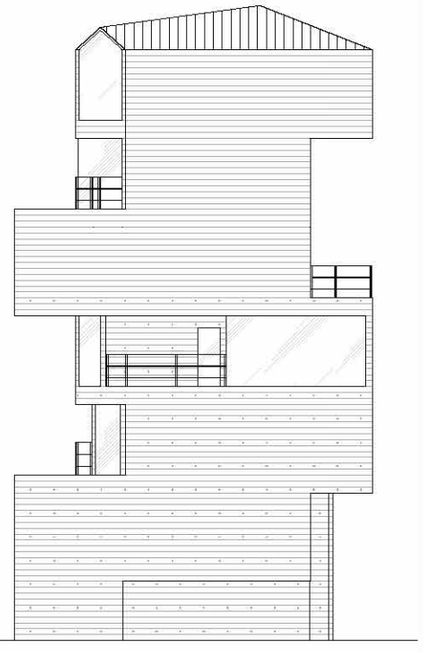
『木塔の家』各階平面図 S=1:250

A ：アトリエ atelier
B ：寝室 bed room
Ch ：子供室 child room
Eh ：玄関ホール entrance hall
G ：車庫 garage
LD ：居間 living dining
K ：キッチン kitchen
Os ：多目的室 open space
S ：書斎 study
T ：テラス terrace
ub ：浴室 unit bath
V ：吹抜 void

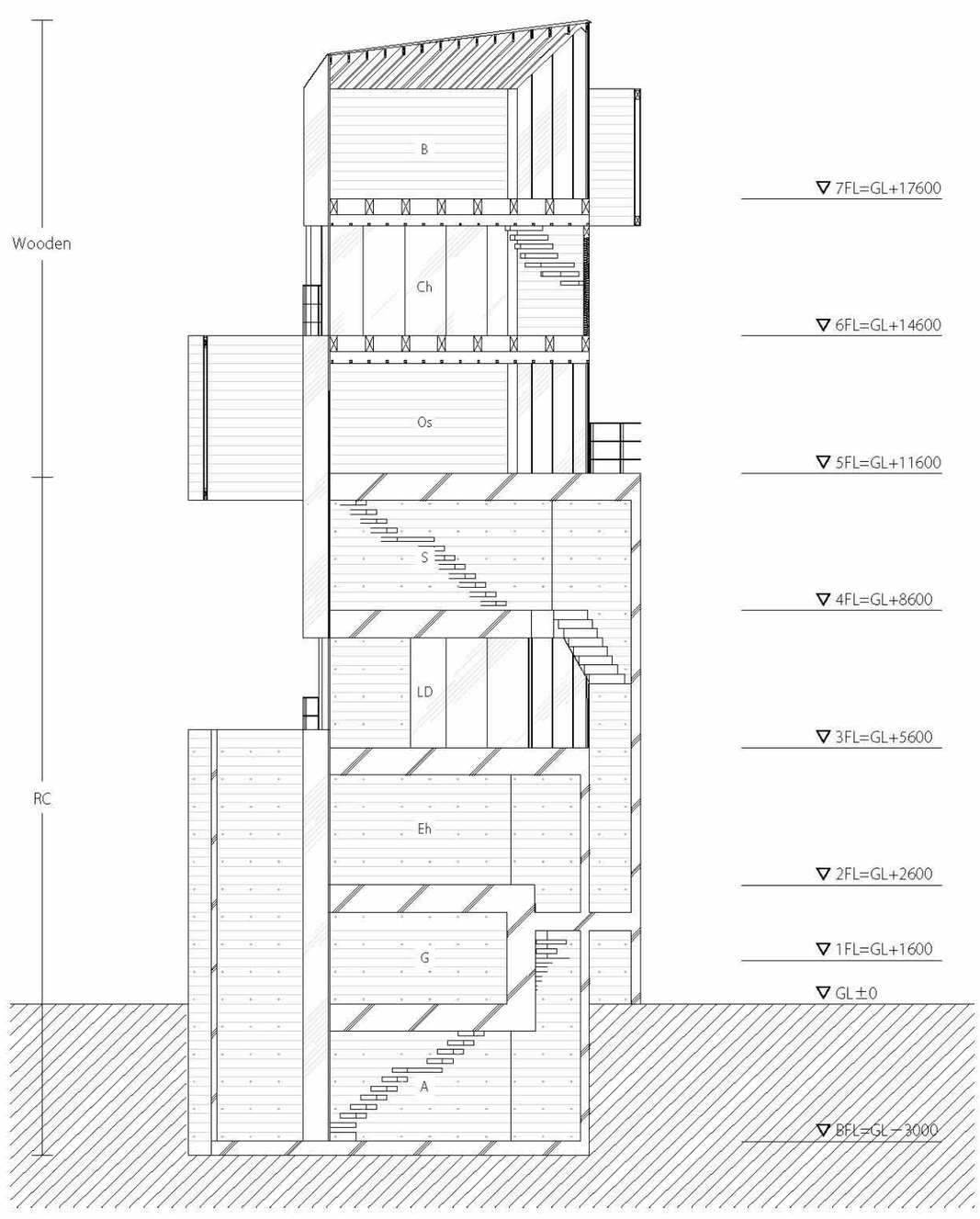
RC 部は過酷な外部環境に対するシェルターであり、木造部は穏やかになった環境と親和する。外部との関係は大きな開口部だけでなく、外に張り出した壁が空間を囲い取ることで内外が曖昧になり、生活に外部環境を取り込むファクターとなる。また、木造部は生活に合わせ可変する柔軟性を持っているため、ライフスタイルの変化にあわせて、増改築が可能である。街の路地のようなアクセスのエントランスから入る室内は、各フロアで異なる空間性と外部との関係が展開され、一連の空間体験は街での体験の延長として生活を営む背景となる。



南東側立面図 S=1:250



北側立面図 S=1:250



A-A' 断面図 S=1:150



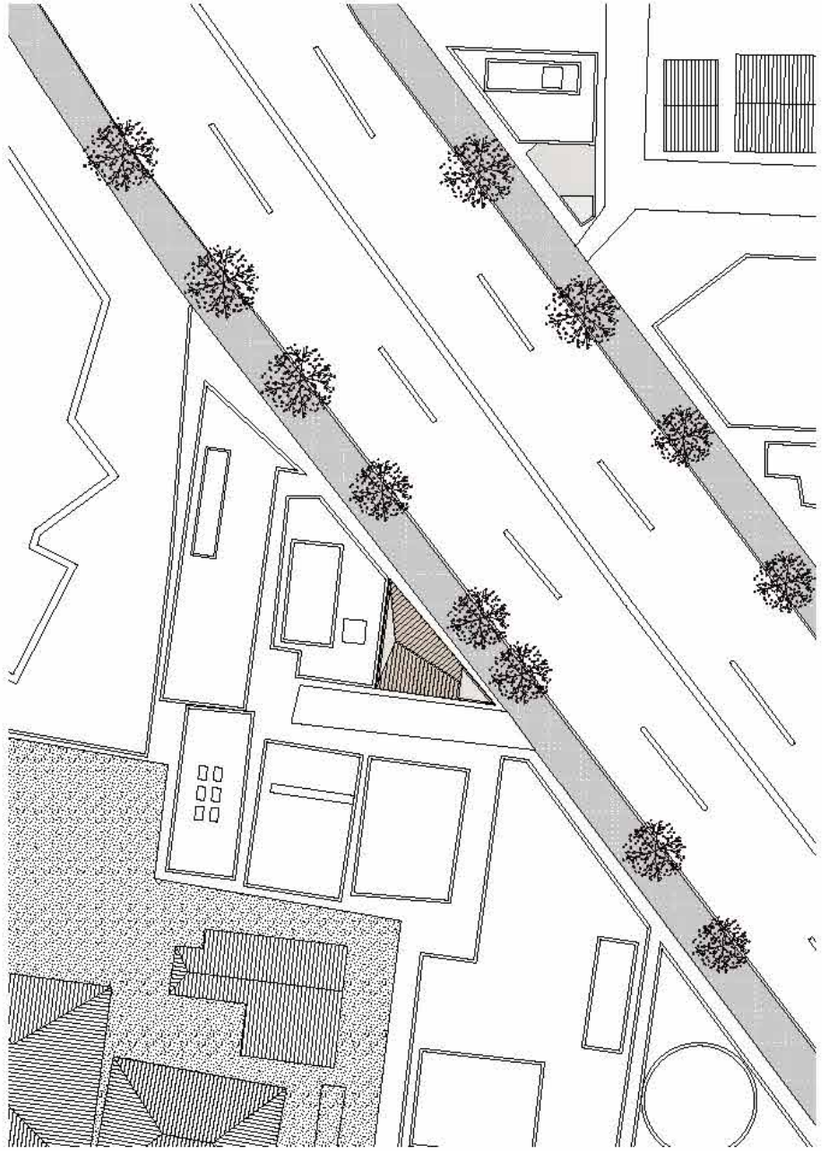












向きにより異なる表情を見せ、街並みに多様さをもたらす。
この住宅が街の変遷を映す鏡として、現在そして未来の街並みを形成していく。

配置図 S=1:500

4



Photo by 五十嵐太郎 監修 新建築社（2014）『戦後日本住宅伝説 刺戟する家・内省する家』新建築社 p.87　一階居間から書斎をみる（松川ボックス #2）

松川ボックス / 宮脇檀

1971

Matsukawa Box, Mayumi Miyawaki, 1971/1978 | Shinjuku-ku, Tokyo



Photo & Text by 宮脇檀（1980）『別冊新建築 日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀』新建築社 pp.132-133 p.135

名称	：松川ボックス #1/#2/#3
設計	：宮脇檀
住所	：東京都新宿区西早稲田
竣工	：1971/11（※第一期）
構造	：RC+W+S 混構造
階数	：地上二階建
敷地面積	：358.9m²
建築面積	：88.5m²（※第二期）
延床面積	：157.5m²（※第二期）
建蔽率	：45.8%（許容 60%）
容積率	：74.0%（許容 300%）
用途地域	：第二種中高層住居専用地域

二つの箱が向かい合うという形で作られた松川ボックスは両者を結ぶものとして中庭が大きなテーマであったし、その時点で既にこの中庭を囲む 3 番目の棟が当然イメージされていた。第一期が純住宅であったのに対し、第二期はそれから 7 年後、当然のことながら第二期では異なった手法になっている。住宅兼ギャラリー＋アパートという型なので、混構造は多少様式として使われているし、表現も日本的なディテールを濃くしている。第二期の工事と同時に塀が取り換えられ、中庭の舗装も腐ってしまった木から石になった。

［宮脇檀］



No.04 松川ボックス

玉江将之
Masayuki Tamae

所属　：岩岡研究室
対象敷地：西側隣地
敷地面積：189.0m²
建築面積：98.0m²
延床面積：207.0m²
建蔽率　：52.0%（許容60%）
容積率　：109.5%（許容300%）

題名 / Title

04 松川ボックス（基本設計）

『都市のインテリア』

City/Interior

―松川ボックス#4
Mastukawa Box #4

コンセプト / Concept

「松川ボックス」に近接する敷地に対して、今回二世帯住宅として「松川ボックス#4」を提案する。

宮脇檀設計の「松川ボックス」が第一期から第三期を経て、中庭を介して個々の建物の関係性が変化していくという点、プライバシーとしてのRC造、インテリアとしての木造という混構造を採用している点に着目し設計を進めていく。

既存の「松川ボックス」に対し大きく門型に開き視線、動線の抜けを意識し、連続的な中庭を形成した。次に、宮脇が内部のインテリアとして採用した木造軸組をS造軸組としRC造の内から外に出す事で、「都市のインテリア」と位置づけ、都市と住宅との間に中間領域をつくり出した。この混構造は3つの個性を持っている。動線（traffic line）としての軸組、プライベートスペース（private space）としてのRC造、セミパブリックスペース（semi-public space）としてのS造。動線（traffic line）は居室間を繋ぐと同時に、都市に対して開く中間領域となり、プライベートスペース（private space）は幅2mの中にプライバシー性の高い機能を配置した。セミパブリックスペース（semi-public space）は、親世帯、子世帯とが常にお互いを意識し合える関係をつくり出している。

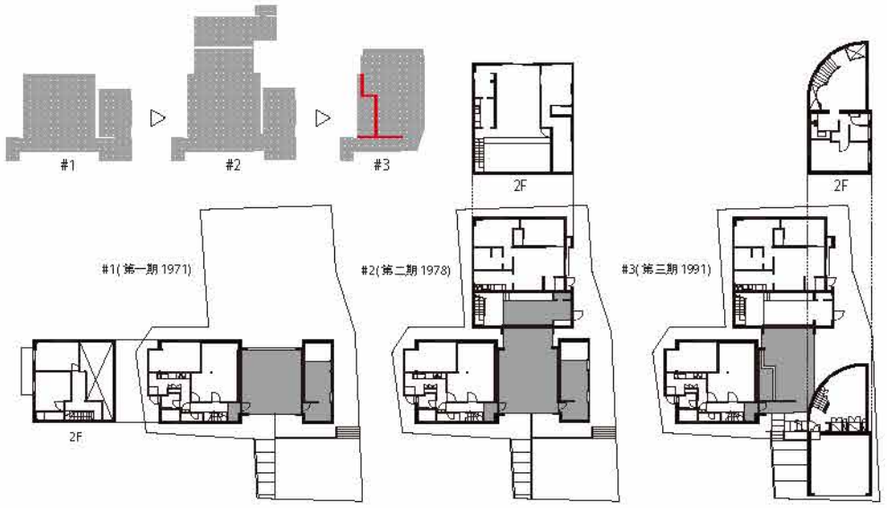
審査講評 / Review

「松川ボックス」はRC造の外殻と木造の軸組造とが入れ子をなす住宅で、こうした建物が同一敷地内に離散集合形式で複数配されていることが特徴である。さらにその建物群は中庭を中心として増改築を繰り返しており、新たな住宅の提案では、こうした時間的流れの中での第4段階の方向性を説得力のある形で示している。すなわち、隣接する敷地に二世帯住宅を新たに提案することで既存の中庭を通り抜け状とし、さらにRCの箱の外側にS造の共用通路を回すことで混構造の表情を連続させている。



ⅰ.) Relationship changed through the courtyard

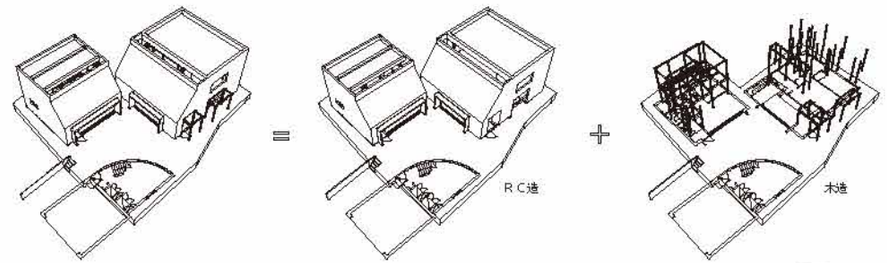
「松川ボックス」は#1から#3までに、中庭を介してそれぞれのボックス間の関わり方が変化してきた。#1では住居と客間兼茶室として住人と来客者との間に適度な距離感をつくり出し、#2では新しくできた賃貸住居に対し、大家と住人とを分けるのではなく中庭を介して緩やかな繋がりをつくり出した。しかし、#3はそれぞれのボックスに対して格子状の塀を用いて、住人同士のアプローチ動線を隔てている。

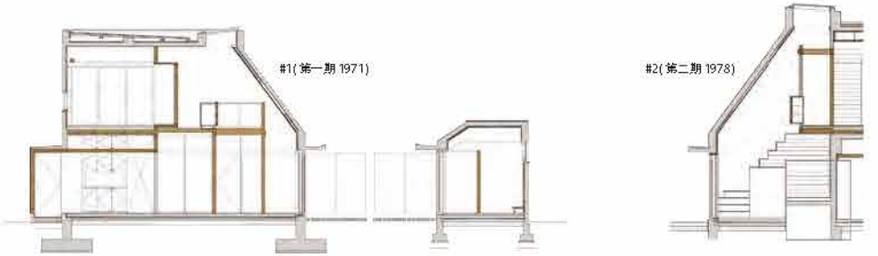


『松川ボックス #1/#2/#3』各階平面図 S=1:600

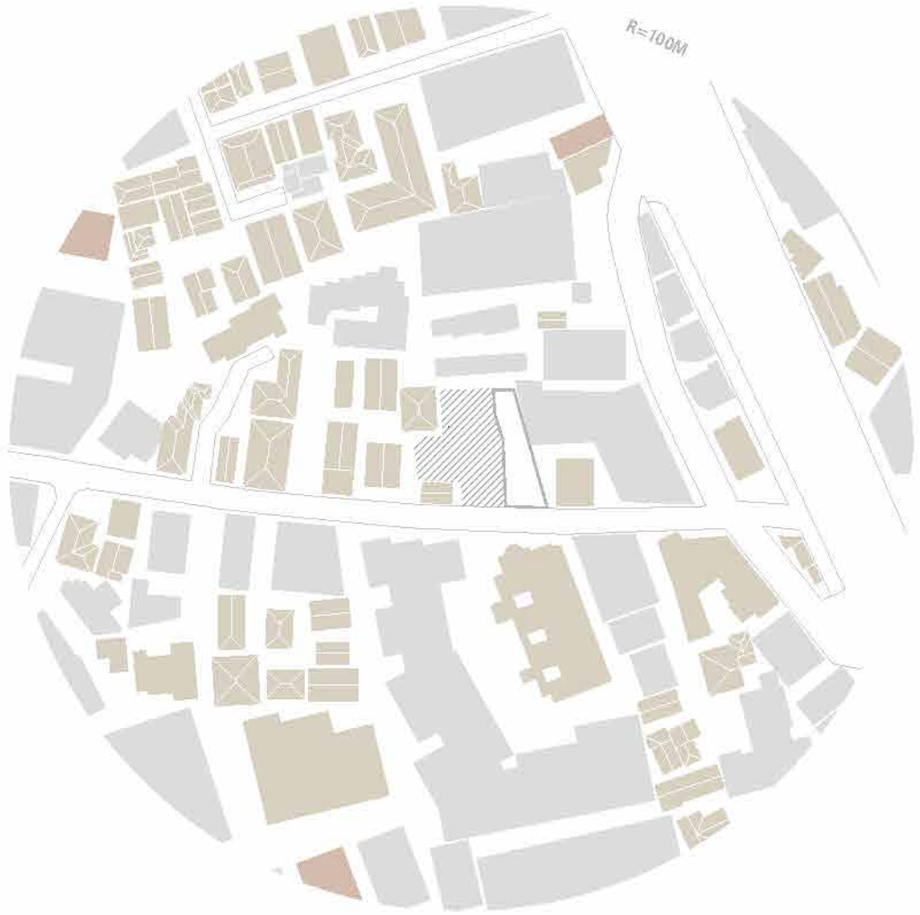
ⅱ.) R.C construction which protects privacy , Wooden construction as an interior

「松川ボックス」はRC造と木造の混構造を採用している。周囲からプライバシーを守る為のRC造、住宅内部のインテリアとしての木造。#1では、RC造と木造が別々の構造体として建てられているのに対し、#2ではRC造に支持されるかたちで、木造が使われている。





『松川ボックス #1/#2』断面図 S=1:200



ⅲ.) Analysis —Surrounding structure

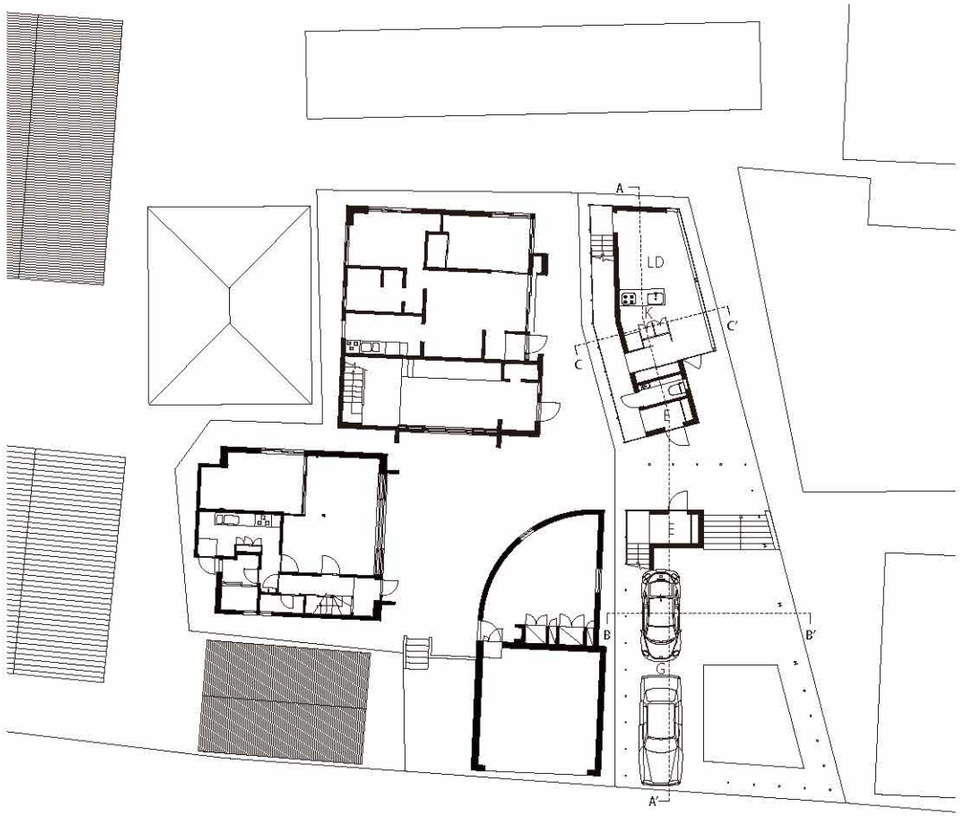
計画敷地の周囲100mの構造形式をリサーチした。「松川ボックス」を境として東側に低層木造住宅が密集し、前面通り沿い～大通りに面して高層RC造が建ち並ぶ。計画敷地は、「松川ボックス」西側に隣接する、他の構造体が交わる中間拠点である。

RC　W　S　松川ボックス敷地　計画敷地

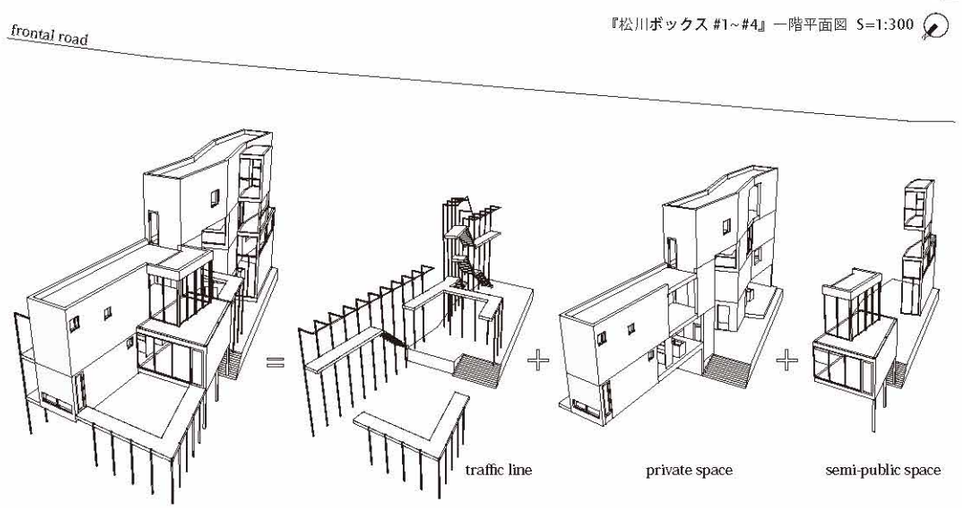
広域配置図 S=1:1500

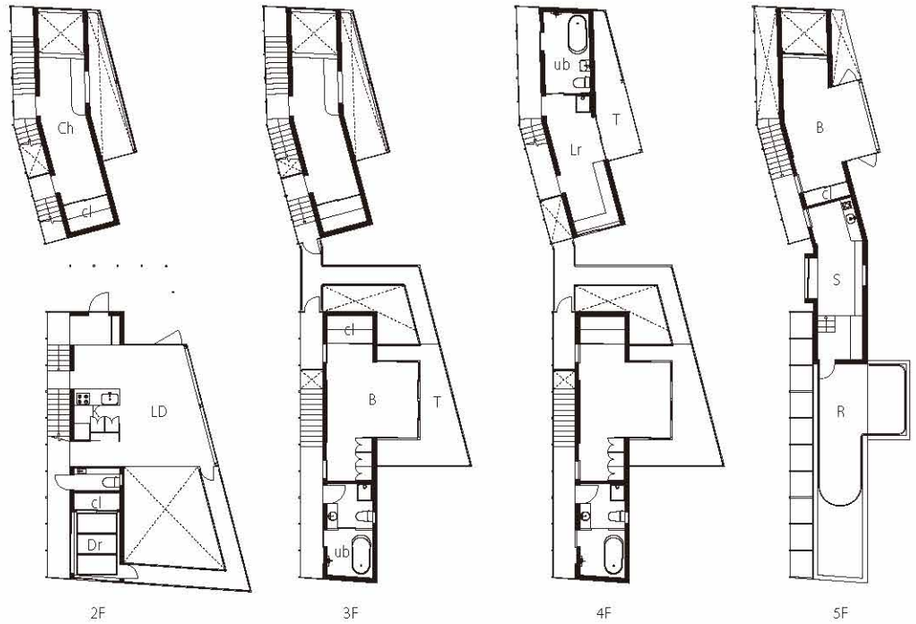
iv .) Matsukawa Box #4

設計に用いた混構造には３つの個性がある。１つ目は居室間を繋ぐ動線(traffic line)としてのＳ造。都市に対し開いた関係性をもつ中間領域をつくり出すと同時に、建材にはパンチングメタルを用い視線を遮らないようにする事で室内でも家族間の存在を感じる事ができる。２つ目はプライベートスペース(private space)としてのRC造。室内の幅を内寸2mにおさえ、都市、中間領域に対してプライバシー性を強くし空間にギャップをつくり出した。３つ目はセミパブリックスペース(semi - public space)としてのＳ造。都市や家族間の視線を繋ぐ働きをもつ。

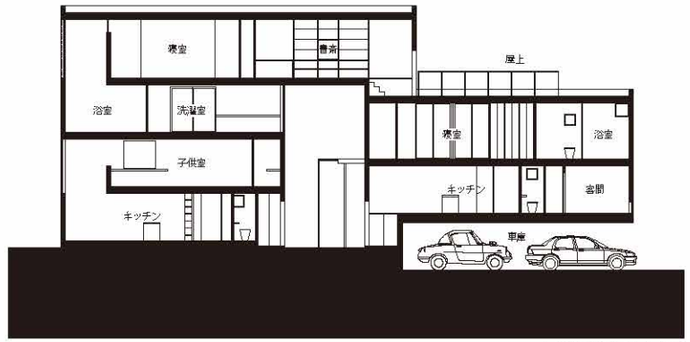


『松川ボックス #1~#4』一階平面図 S=1:300



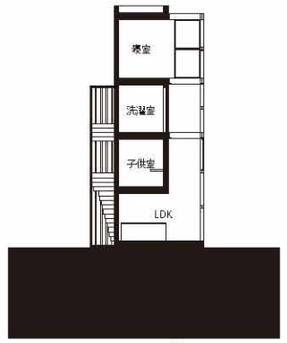


『松川ボックス #4』各階平面図 S=1:300

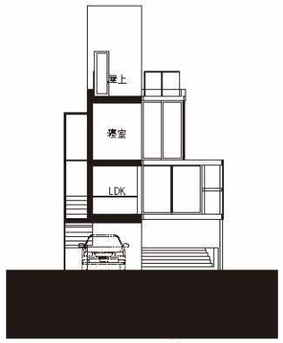


A-A′ 断面図 S=1:300

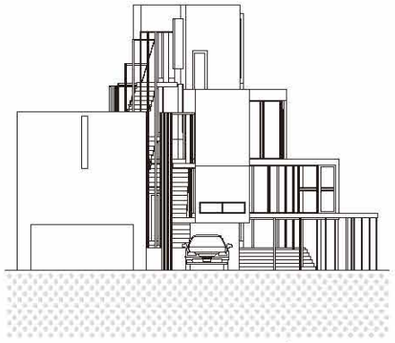
B	:寝室	bed room
Ch	:子供室	child room
cl	:納屋	closet
Dr	:客間	drawing room
E	:入口	entrance
G	:車庫	garage
K	:キッチン	kitchen
LD	:居間	living dining
Lr	:洗濯室	laundry room
R	:屋上	rooftop
S	:書斎	study
T	:テラス	terrace



C-C′ 断面図 S=1:300



B-B′ 断面図 S=1:300



立面図 S=1:300















DESIGN / PLANNING

5

1976

住吉の長屋 / 安藤忠雄

Row House, Sumiyoshi, Tadao Ando, 1976 | Sumiyoshi-ku, Osaka



Photo by 子猫学 (2008)『Heavenly Houses 3 住吉の長屋 / 安藤忠雄』東京書籍 p.17

名称	：住吉の長屋
設計	：安藤忠雄　黄志雅樹
住所	：大阪府大阪市住吉区
竣工	：1976/2
構造	：壁式 RC 造
階数	：地上二階建
敷地面積	：57.3m²
建築面積	：33.7m²
延床面積	：64.7m²
建蔽率	：58.8% (許容 60%)
容積率	：112.9% (許容 200%)
用途地域	：第二種中高層住居専用地域

〈PACKAGED ENVIRONMENT〉その内部空間のコアとなる空間は、外界との接触を最小限に押えられたが故に生じた〈個〉の部分と、天空に向かって唯一の触手を延ばした〈突出した孔〉から注ぐ光との出会いの空間として、イメージされる。住居を都市の諸悪から隔絶し、まさに、個の領域で、操作可能な内部空間の充実に、すべてを託した〈都市ゲリラ住居〉とは、大阪・東京などの大都市における、独立住居の存在を意味づける論理を包摂している。

安藤忠雄「都市ゲリラ住居」(1978)『臨時増刊号 都市住宅 住宅第 4 集』鹿島出版会 pp.18-19

[安藤忠雄]

Photo by 子猫学 (2008)『Heavenly Houses 3 住吉の長屋 / 安藤忠雄』東京書籍 p.31　一階台所、食堂から中庭をみる



No.05 住吉の長屋

堀 越 一 希
Kazuki Horikoshi

所属　：岩岡研究室
対象敷地：前面道路向正面
敷地面積：38.0m²
建築面積：30.4m²
延床面積：39.1m²
建蔽率　：79.9%（緩和許容80%）
容積率　：93.5%（許容200%）

題名 / Title

05 住吉の長屋（安藤忠雄）

『都市スパイ住居』
Urban spy residence

—住吉の隠屋（なばりや）
Spy House, Sumiyoshi

コンセプト / Concept

「外部環境への〈嫌悪〉と〈拒絶〉の意思表示としてファサードを捨象し内部空間の充実化をめざす—」

—1973年。安藤は、マニフェスト「都市ゲリラ住居」において、メタボリズムの蔓延る世界を否定し矩形の箱にミクロコスモス（小宇宙）を追求した。仮令その言説が仮想であれ、戦うべき対象を明確に定めたことによって、住居に強靭な形式性を与えたことは言うまでもない。

—2015年。かつて、伝統的構法による長屋町が形成されていた住吉区は、現代法規によって整理整頓され、車庫付き三層の〈RC密〉へと姿を変える。〈建蔽率許可制度によって大量生産される住宅生成フロー〉これを新たなる敵と定め、都市認識と巧みに乖離させることで成り立つ、快活な〈裏切り行為〉による「都市スパイ住居」は、現代においていかなる意味をもちうるか。

奥行5間を真っ二つに切断し、生活は地下-建築限界10mに至るまでファサード側で全て完結する。回避不能な車庫によって決定された強靭な断面形式と、内部空間の裏切りは、いかに、容積率を無駄にし、法規を愚弄するかに徹している。言うなれば「都市スパイ住居」は、騙された都市生活者のアジトが、独立住居の存在を意味づける論理を包摂している。

審査講評 / Review

「住吉の長屋」は周辺環境に対して完璧に閉鎖することで住むことのリアリティを獲得しようとした住宅といわれているが、実際には強固な壁で閉じれば閉じる程、周囲から突出した存在となるといったジレンマが生じている。対面する新たな住宅では、閉じた表現の背後に隠された開放的な空間という構成を、既存の「住吉の長屋」以上に誇張し拡張して提案している。「住吉の長屋」同様に、住宅としての機能動線にはやや問題があるものの、天井7mを超える吹き抜けは、建物の内外を曖昧化する空間として説得力がある。



Spy House, Sumiyoshi

「都市ゲリラ住居 fig1」の真正面、奥行２間×間口５間に新たなる住宅を掘える。車庫付き三層、出窓によって採光を得る画一的ファサード fig2 に、まるで〈カメレオン〉のように擬態する秘密結社が佇む。建蔽率許可制度 fig3 により緩和寡略したヴォリュームに対して、逆に、その適用条件を嘲笑う形式をこの住居に与えた。具体的には、まず敷地を真っ二つに両断し、回避不能の車庫により押出された〈コの字型ヴォリューム〉によって住空間は形成される。階数制限を超えた適用範囲外（地下〜塔屋）まで前面道路側五層で潜伏生活の全てを担う。荒摺りの内壁仕上と打放シ立面のコントラスト、奇妙にスプリットされた右出窓サッシュ fig4 からは、西日が勢いよく前面道路を狙撃する。開口制限により通風及び採光の九分九厘をトップライトで賄い、吹抜で促進される重力換気システムによって環境効果を得る。階段状にテーパーのついた壁式構造を三層上部で切断し、スティールラチスで四層＋塔屋を浮遊させ構造を切替えると同時に、屋上庭園・外部階段が迎える新たな上界が現れる。住人が塔屋屋上へと至ったとき、初めてパラペットの造形 fig5 が「住吉の長屋」と相似していることに気づかされる。快活な裏切り行為によって生み出される、空間体験と認識の乖離。

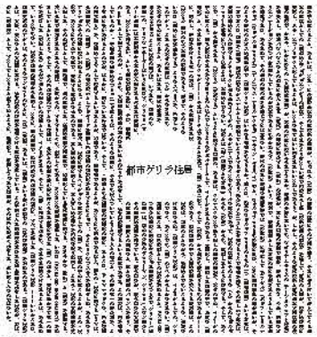


fig1. Urban guerrilla residence 1973

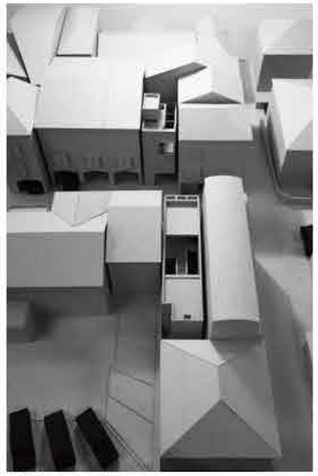


fig2. Bird's-eye view

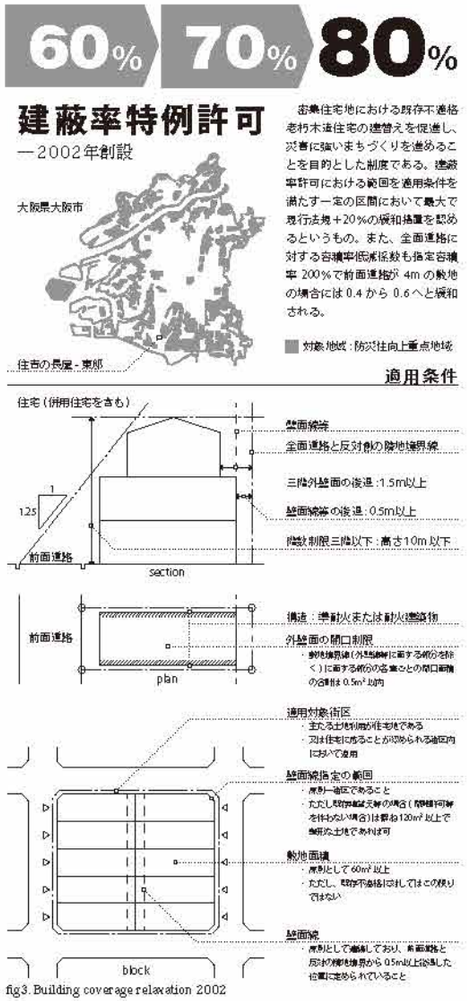


fig3. Building coverage relaxation 2002

fig1 = 支路款雄「都市ゲリラ住居」(1973)『増刊都市住宅 都市住宅 4号』鹿島出版会 ,pp.18-19
fig2 = 『大阪市建蔽率許可制度』大阪市住宅局建築事務建築企画課
fig3 = 千葉学 (2008)『Heavenly Houses 3 住吉の長屋 / 支路款雄』東京書籍 ,pp.64-65,70-81pp.70-71

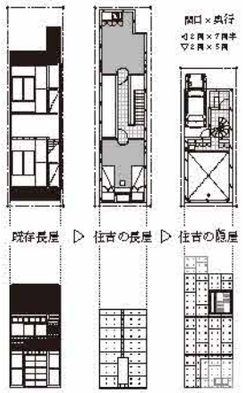


fig4. Plan/Facade S=1:500

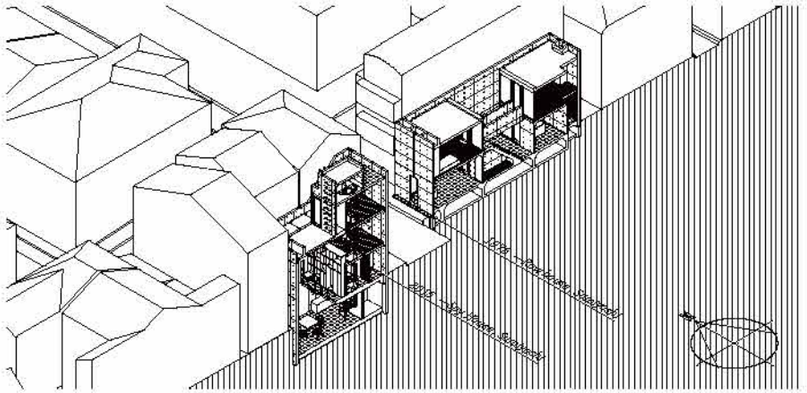
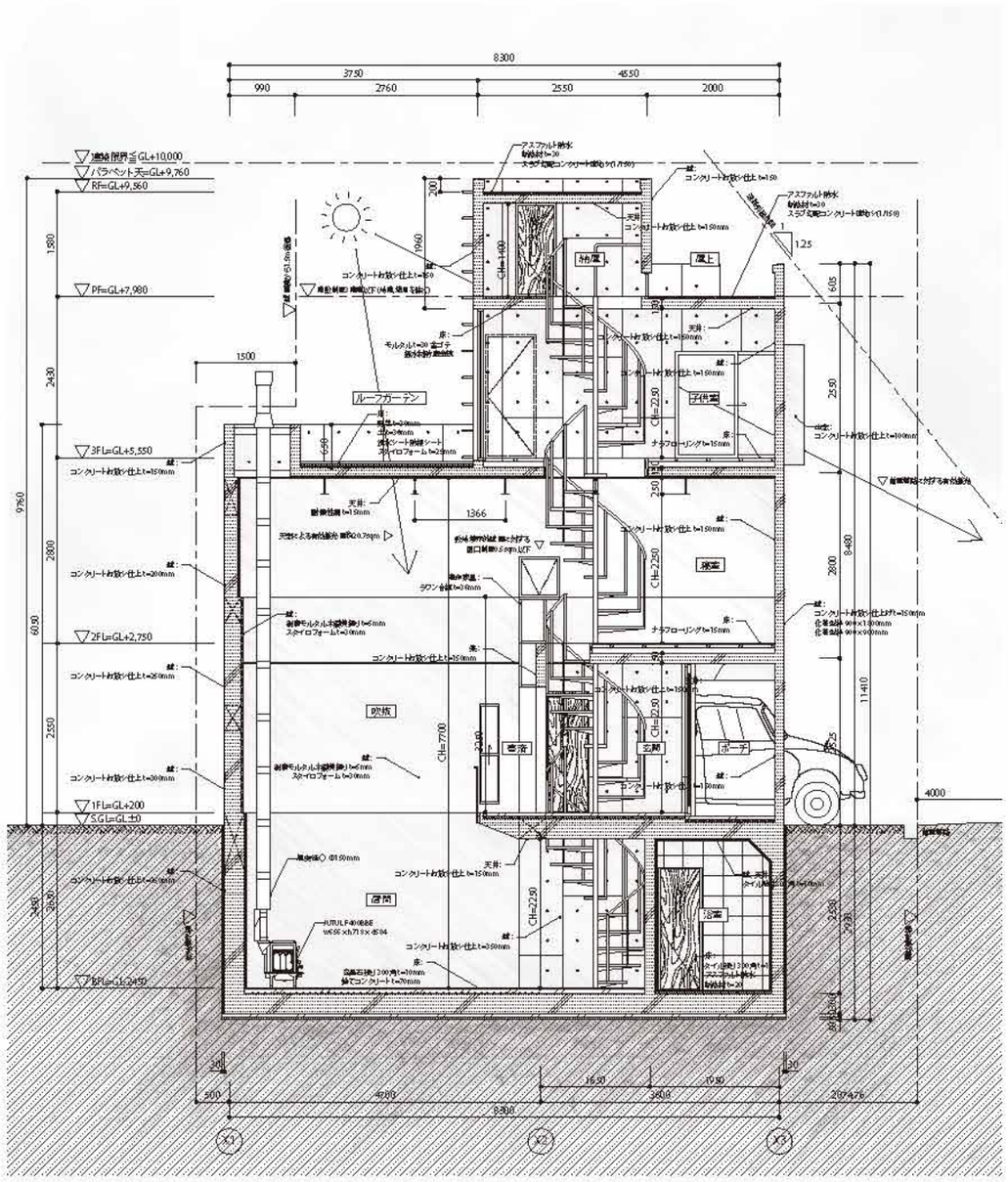


fig5. Isometric


8300
3750
4550
990
2760
2550
2000
連続開口 GL+10,000
パラペット天=GL+9,760
RF=GL+9,560
PF=GL+7,980
3FL=GL+5,550
2FL=GL+2,750
1FL=GL+200
SGL=GL±0
BFL=GL-2450
1500
1366
9760
2800
2550
2430
6030
1580
1960
1250
605
2250
2800
8490
11410
4000
2550
3450
3600
7700
3250
2250
ルーフガーデン
子供室
寝室
吹抜
書斎
玄関
ポーチ
屋上
納屋
浴室
屋間
CH=2250
CH=2250
CH=2250


i


ii

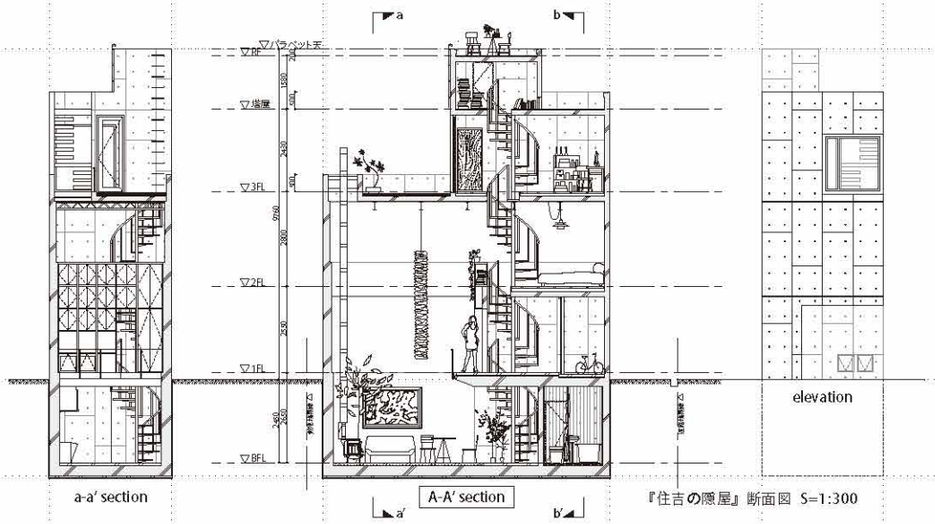

iii


iv

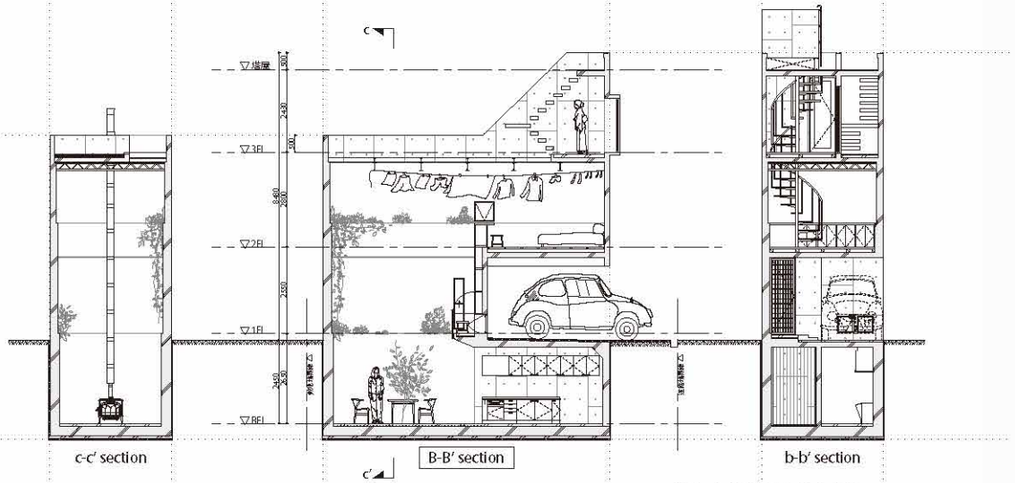

v

1 .) living room
ii .) rooftop garden
iii .) outside stairs
iv .) facade
v .) bed room

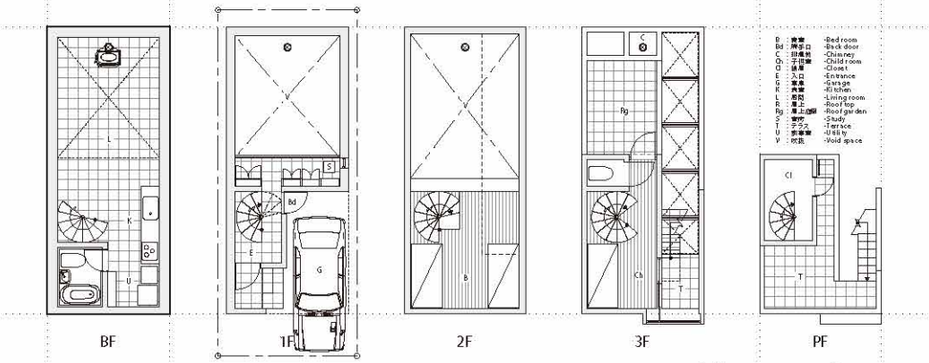




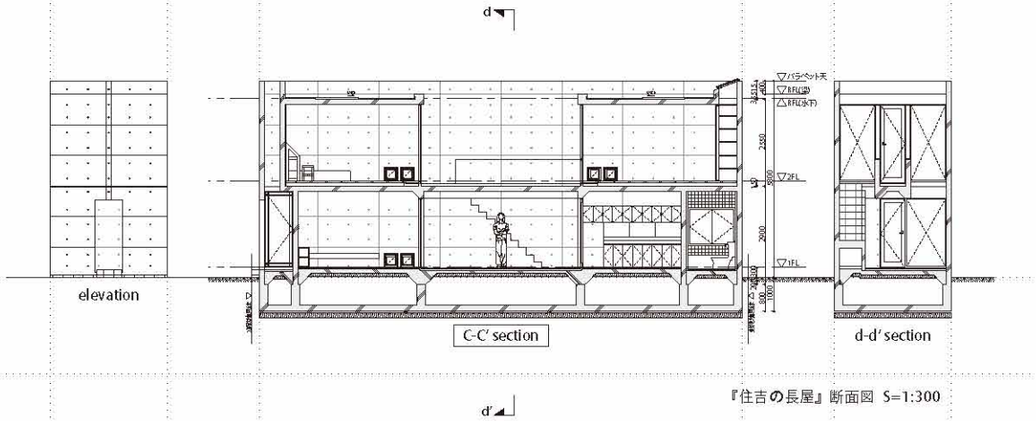
『住吉の隠屋』断面図 S=1:300



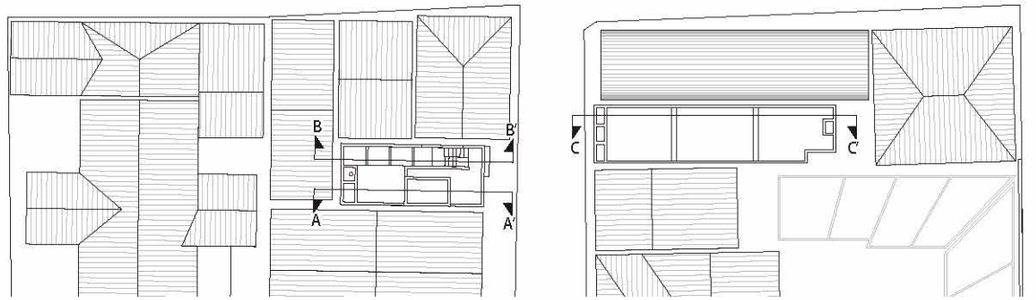
短手・長手断面図 S=1:300



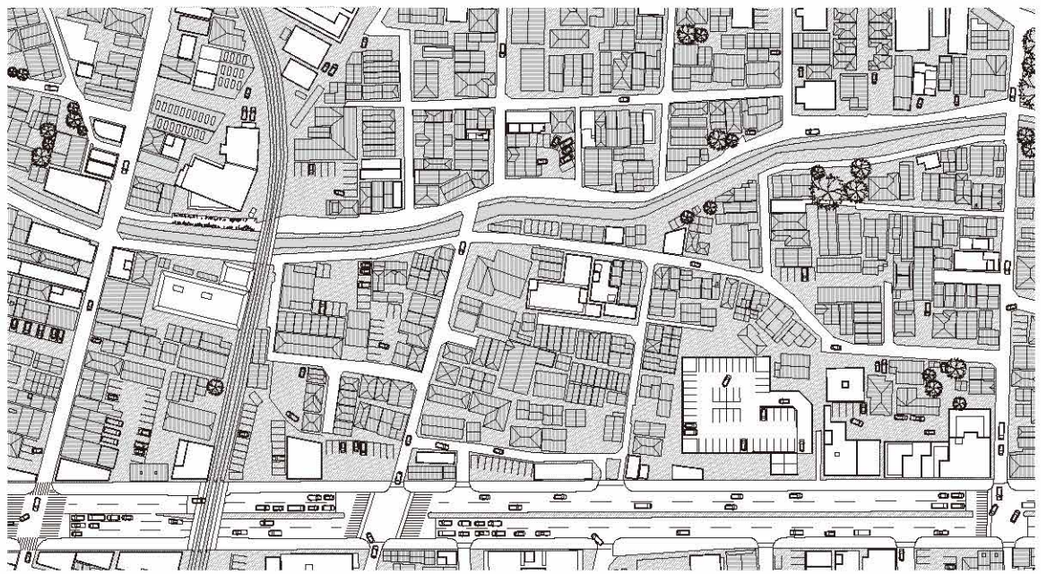
各階平面図 S=1:300



『住吉の長屋』断面図 S=1:300



配置図 S=1:400



広域配置図 S=1:2500

6

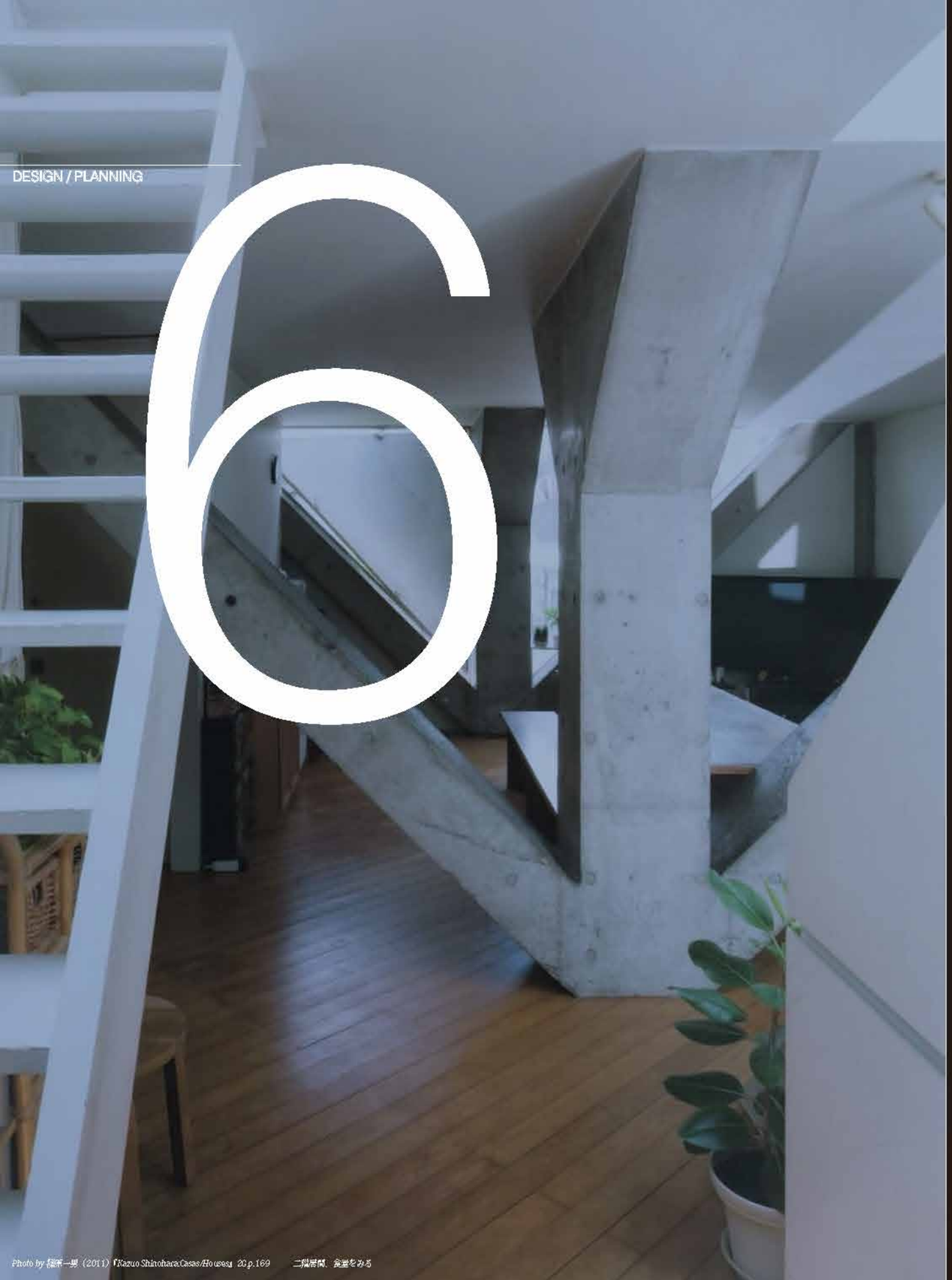


Photo by 篠原一男（2011）『Kazuo Shinohara:Casas/Houses』2G,p.169　二階居間、食堂をみる

上原通りの住宅 / 篠原一男

House in Uehara, Kazuo Shinohara, 1976 | Sibuya-ku, Tokyo



Photo by 篠原一男（2011）『Kazuo Shinohara:Casas/Houses』2G,p.163

名称	：上原通りの住宅
設計	：篠原一男
住所	：東京都渋谷区代々木上原
竣工	：1976/5
構造	：RC造一部鉄骨造
階数	：地上二階建
敷地面積	：136.5m²
建築面積	：80.5m²
延床面積	：203.6m²
建蔽率	：58.9%（許容 60%）
容積率	：149.0%（許容 150%）
用途地域	：第一種低層住居専用地域

二層分のコンクリート殻は１回のコンクリート工事で終了した。ふたつの型の方杖が柱頭で直行している６本の柱でこの殻を支持する。外殻をつくるために有効な解法であったこの方杖による無梁版構造は、敷地と家族構成に対応する平面と合わせた時、１カ所で混乱が生じた。間を置いてつくる予定であった屋上の小屋を、本体工事の直前に同時に施工することに決まった。鉄骨に鉄板折板でボールドを架けたが、ここでも異なった系に属する事物の突き合わせを私は選んだ。

篠原一男「第三の様式」（1977）『建築雑誌 新建築 1977 年 1 月号』新建築社 p.219-228

［篠原一男］



No.06 上原通りの住宅

大村高広
Takahiro Omura

所属　：岩岡研究室
対象敷地：前面道路向正面
敷地面積：107.5m²
建築面積：53.6m²
延床面積：92.2m²
建蔽率　：49.9%（許容60%）
容積率　：85.8%（許容150%）

06 上原通りの住宅（提案）

題名 / Title

『 Uehara Inverted 』

―「突撃隊」軽装備で前へ
Go ahead! Light-armed troops

コンセプト / Concept

都市を否定し、小さな住宅の中で閉じたユートピアを目指していた篠原一男の作品は、「第３の様式」を境に、積極的に都市を論じる方向へ向かう。篠原にとっての都市とは、複数の場の離散的な複合であり、事物の無造作な衝突であり、混乱した美しさをもつ現象であった。いま、住宅の「建ち方」を考えるとき、篠原一男が「第３の様式」において残した仕事は大変示唆に富む。

本提案では、篠原一男の「第３の様式」の分析を通して、そこでのキーコンセプトを「建ち方」の問題として生成変化させることを試みた。ここでは、篠原が想定していた〈イメージとしての都市空間〉を、前面住居のファサードや隣家との空隙、庭との関係といった実在する事物に置き換えている。

具体的には、建築ボリュームをできる限り小さくし、かつ架構を「外付け」にすることで建築エレメントを敷地の四周に露出させ周辺環境と直接対峙させるという方法をとった。１つの小さな住宅が敷地に出現することにより、周囲のなんでもない風景が活性化される。そんなことを考えながら設計をした。

審査講評 / Review

「上原通りの住宅」は（設計者の意図に反して）ある種のロボットのような愛くるしい表情を見せる家であり、竣工してから現在まで周囲に対して常に異彩を放し続けてきた。その正面に向かい合って建つ新たな住宅の提案では、構造体を露出させるというやや古典的な表現手法を用いているように見えるが、この形式が住宅相互の間にできる余白としてスキマを建築化するための道具立てであるようにもみえる。そうした意味で、都市を住宅に重ねることに成功しているとみてよいだろう。



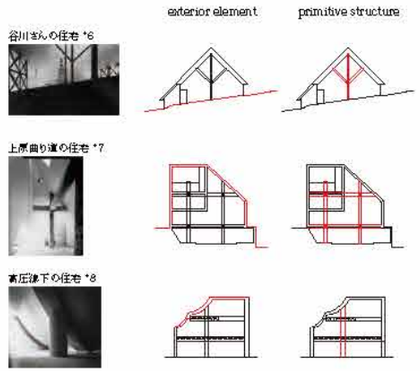
ⅰ.) Another possibility of third style

篠原一男は、時代とともに思想を展開させ、それらを自ら様式として順列化させた建築家だった。伝統に傾倒した「第１の様式」、キュービックな外形と垂直性の高い内部空間を特徴とする「第２の様式」。それに続く「第３の様式」の代表作がこの「上原通りの住宅」である。その後篠原は幾何学を多用した「第４の様式」に向かうが、私は「第３の様式」における篠原の思考と実践にはまだ展開の余地が残されているのではないかと考えている。それは「第３の様式」にはもれなく、外的な因子が建築の中に「他者」として取り込まれているからである。ここでは取り込まれている「他者」についてもう一度考え、「建ち方」という水準まで議論を展開してみよう。



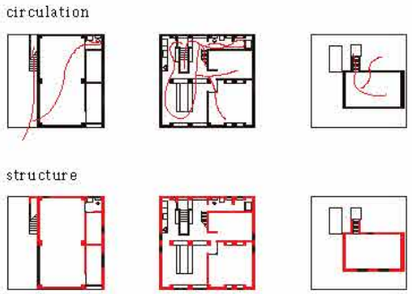
ⅱ.) Exterior spatial element in interior space

「第3の様式」の一連の作品では、〈外的な要素＝他者〉と、〈プリミティブな架構＝自律的な要素〉の対立が繰り返し用いられている。「第3の様式」の最初の作品である「谷川さんの住宅*6」を例に取ると、内部に取り込まれた斜面は明らかに外的な要素、つまり自分自身では〈完全にコントロールしきれない存在＝他者〉である。一方、斜面からすっと伸びる方杖をもった柱は、無限に反復が可能であるような、自律的でプリミティブなストラクチャーである。個々のエレメントは文化的な意味が剥奪され即物的に用いられているのにもかかわらず、互いに関係しあうことで、新たな意味や場所が無限に生産される。これが篠原が目指した〈冷たい意味の空間〉だ。

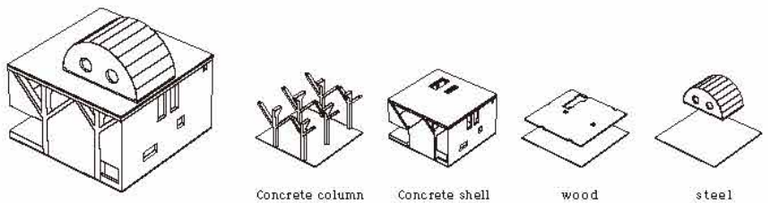


ⅲ.) Analysis —House in Uehara

方杖をもつ６本の柱で二層分の高さを持つコンクリートの外殻を支え、内部を木造の床・壁で分節する、というのが「上原通りの住宅」の基本的な構成である。この構成により5mの斜線制限をクリアしつつ２台分の駐車スペースを確保し、かつコンクリートの打設を１回で済ませている。構造的にも構法的にも、予条件に対して極めて合理的な解答である。しかし、合理性を徹底させることにより生まれるのは、プランニングと架構の決定的なズレである。このプランニングと架構のズレ、あるいは異なる架構形式のハイブリッドが、篠原のいう「異なった系に属する事物の突き合わせ」だ。ここで重要なのは個々の部品が「単体でみると合理的であり、かつ意味を持たない」ことである。それらが無造作に複合することで、詩的インパクトが発生する。



*1～8(2011)『Kazuo Shinohara:Casas/Houses』2g,287pp.
*1) p.74 , *2) p.100 , *3) p.104 , *4) p.162 ,
*5) p.240 , *6) p.159 , *7) p.197 , *8) p.211

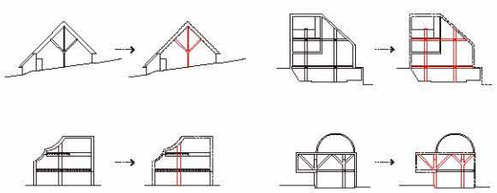




1 : site 2 : House in Uehara 広域配置図 S=1:2000

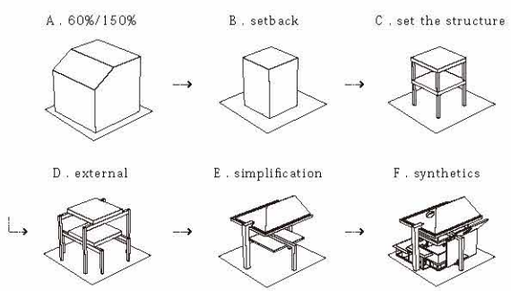
iv.) Relativization of the shell

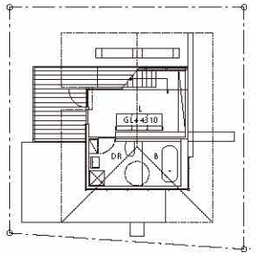
本提案では、篠原一男の建築がもっていた外殻を相対化することで、構成材と周辺環境を直接対峙させることを試みる。つまりこれは、「第3の様式」で篠原が組み込んでいた〈外部因子＝他者〉を、文字通り両隣の民家に対応させることで、「異なるもの同士の複合」というコンセプトを「建ち方」の水準まで引き上げられるかを検証するものである。いま我々が議論すべきはイメージとしての都市ではなく、ましてはアナロジーやメタファーとしての都市でもない。向こう三軒両隣の具体的な都市環境である。前面住居のファサードとの関係の中で、両隣の住居との空隙、あるいは庭との関係の中で、〈冷たい意味の空間〉を発生させることはできるか。小さな住宅の「建ち方」のアイデアによって、都市を活性化させることは可能か。



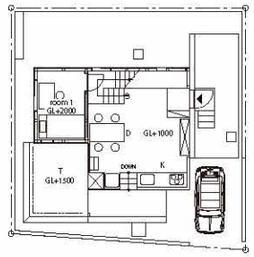
v.) External structure

(A)まず、法規いっぱいのボリュームを設定。(B)周辺の空隙が小さく死んでいるので、1.5mずつボリュームをセットバック。(C)外部空間に余裕が出てきた。そこにシンプルな架構を設定。しかしストラクチャーによるプランニング・外皮の制約が大きい。(D)思い切って架構を「外付け」にする。外部空間に建築エレメントが露出し、内部空間・外皮の構成がストラクチャーから独立する。しかしまだ単調なリズムで無駄が多い。(E)架構の数を減らしシンプルに、かつ個々のキャラクターが際立つようにする。建物の四周にそれぞれ別のキャラクターをもった建築エレメントがあらわれた。(F)最後にプランニングと外皮、インテリアの要素を複合させる。過剰にキャラクタライズされた外部空間とニュートラルで無個性な内部空間の対比。

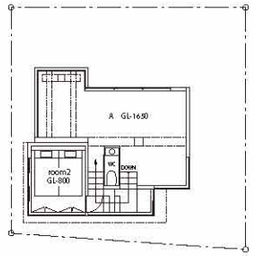




二階平面図 S=1:300



一階平面図 S=1:300



地階平面図 S=1:300

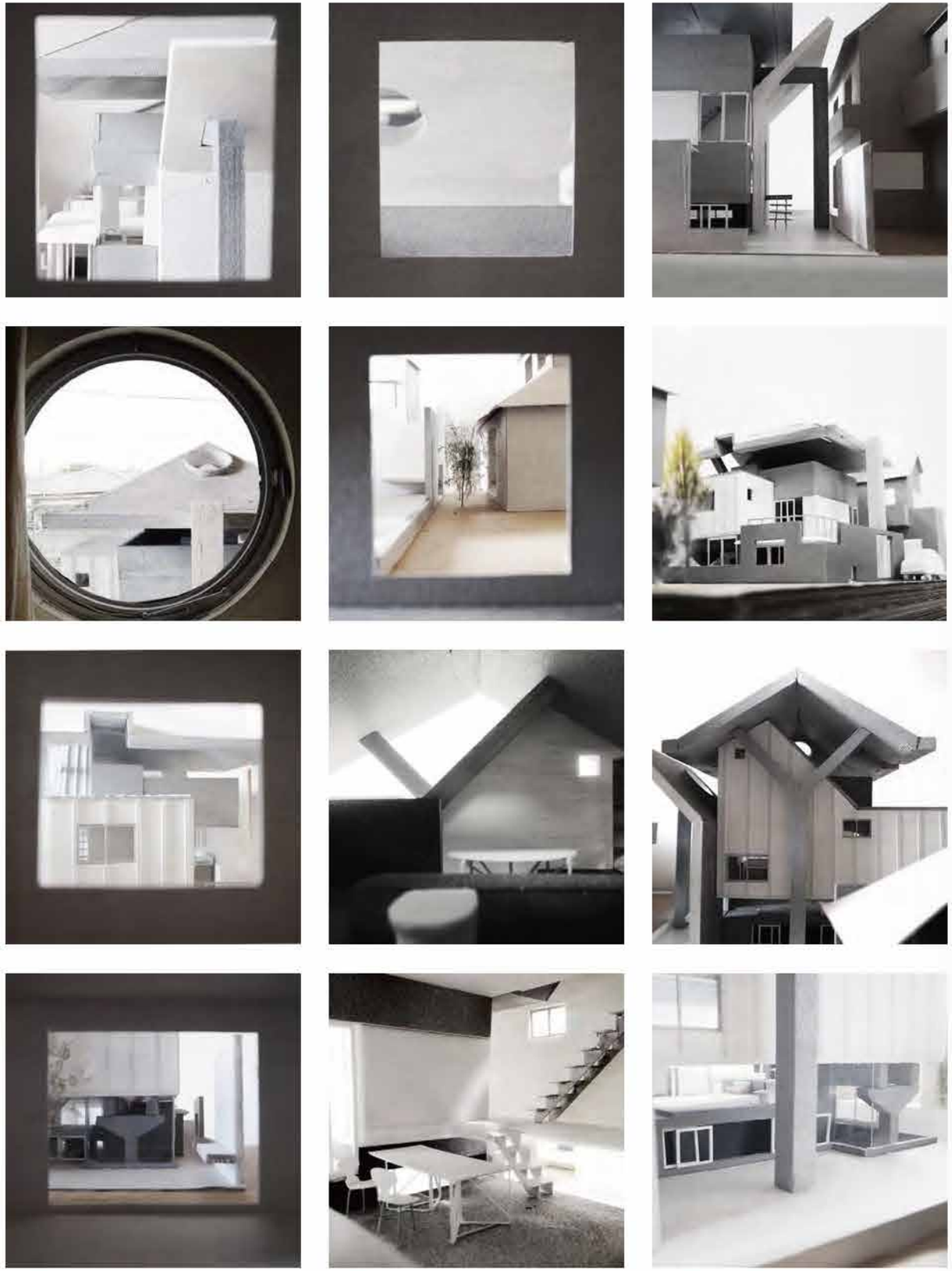


断面図 S=1:300

A:アトリエ K:キッチン D:ダイニング L:リビング B:バスルーム WC:トイレ room1:子供部屋 room2:寝室 T:テラス



配置図 S=1:1000



1. 西側厨家のとある一室からの眺め、混乱
2. 「上原通りの住宅」三度からの眺め
3. 東側厨家のとある一室からの眺め。フレーミングにより外形が断片化されることで建構が消え強い浮遊感を主む
4. 南側厨家のとある一室からの眺め、即物性
5. 西側厨家のとある一室からの眺め、抽象
6. 西側厨家のとある一室からの眺め、日常
7. 二度内部（GL+4300）、外在化した建構が現れてば消える
8. 一度主室（GL+1000）、ニュートラルな内部空間
9. 西側厨家との空隙、象徴
10. 正面道路側外観、塀を建築のエレメントとして扱う
11. 周囲との関係の中で四面がそれぞれ異なる外形となった
12. 南側の外部空間、露出した建構が厨家の底と対比的に現れる過剰にキャラクタライズされた外部空間



7

Photo by 坂本一成研究室，新建築社（2008）『坂本一成 / 住宅 (Kazunari Sakamoto/Houses)』新建築社 p.43　二階主室から玄関を見下ろす

今宿の家 / 坂本一成

1978

House in Imajuku, Kazunari Sakamoto, 1978 | Yokohama-shi, Kanagawa



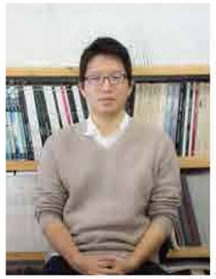
Photo by 坂本一成研究室，新建築社（2008）『坂本一成 / 住宅 (Kazunari Sakamoto/Houses)』新建築社 p.40

名称	：今宿の家
設計	：坂本一成
住所	：神奈川県横浜市今宿
竣工	：1978/12
構造	：木造，軸組構法
階数	：地上二階建
敷地面積	：165.4m²
建築面積	：57.4m²
延床面積	：98.7m²
建蔽率	：34.7%（許容 40%）
容積率	：59.7%（許容 80%）
用途地域	：第一種低層住居専用地域

横浜の内陸部の一様にけだるい大規模な新興分譲住宅地の一区画にこの建物は計画された。この住宅の図像が私の他の住宅と著しく異なって見えるとすれば、それはファサード全体のプロポーションのとり方の違いと、積極的な開口部の配列の扱いによるのであろう。内部を性格づけているのは主階である上階を覆う水平な天井であり、さらにそれによって上面を均一に限定された全体が、床のレベルの序列的変化によって各場を形成している仕方による。

坂本一成「家形を思い、求めて」(1979)『建築雑誌 新建築 1979 年 2 月号』新建築社 pp.215-221

[坂本一成]



No.07 今宿の家

江 間 匠 太
S h o t a E m a

所属　　：岩岡研究室
対象敷地：北側隣地
敷地面積：172.2m²
建築面積：66.3m²
延床面積：88.5m²
建蔽率　：38.5%（許容40%）
容積率　：51.4%（許容80%）

題名 / Title

『今宿の家を思い、求めて』

Seeking the House in Imajuku

一金が谷の家

House in Kanegaya

コンセプト / Concept

分譲住宅地では、効率的な街区割りのため背中合わせに敷地が分割されている。「今宿の家」が南側に前面道路を有するので、背中合わせになっている敷地は北側に前面道路を有し北側アプローチとなっている。「今宿の家」のファサードは南向きだからこそ可能だが、背中合わせ北側の敷地で、前面道路に対してファサードを形成することが出来るだろうか。

この土地は北向き斜面のため、造成により前面道路から2～3mの擁壁上に敷地がある。そこで建物をアイレベルに入る高さまで押し下げ、開口の大きさと位置を見直すことで、北側アプローチの住宅の前面道路に対してファサードの形成を試みる。また「今宿の家」に面する窓は、「今宿の家」をオマージュする。

分譲住宅地では、均質化した街並みが続いている。このような場所にどのようにして新しく街並みを構築していくことが出来るだろうか。周囲の住宅の一部をオマージュし、そこに新たな価値を付加させる。「今宿の家」の一部をオマージュし、北面のファサードのあり方を付加させる。

この住宅でその答えを示せたのではないだろうか。

審査講評 / Review

「今宿の家」は横浜郊外の丘陵地に開発された戸建分譲住宅の一角に建つ建物で、南面の街路に対してファサードをセットバックさせつつ周囲と異化されたアイコンを作り上げている。新たな住宅の提案では、この建物と背中合わせとなる北面の敷地を設定している。敷地と道路との境界面に存在する既存擁壁を本体と繋げて建築化することで、異化されたファサードをつくることに成功しているが、ファサードが北面になることを逆手に取った空間構成をさらに詰めていくことができたのではないかと思われる。



i .) House in Imajuku

戸建て住宅の最も一般的な配置である、敷地の南側にとった庭に、住宅の長手の開口を向ける南面配置をしている。また周囲のファサードはライン状に揃えられている。ファサードは、家型を基本としているが、妻側に下屋を張り出させて変形させ、さらに袖壁がつけられている。また、架構と表層とが意図的にずらされていることにより、開口部のガラス越しに柱が見えてきている。

ii .) Site

新興分譲住宅地では、効率的な街区割りのために背中合わせに敷地が分割されている。「今宿の家」が南側に前面道路を有するので、背中合わせになっている敷地は北側に前面道路を有し北側アプローチとなっている。「今宿の家」のファサードは南向だからこそ可能だが、背中合わせ北側の敷地で前面道路に対してファサードを形成することが出来るだろうか。

iii .) Elevation of the surrounding housing

周辺住宅の前面道路側立面を見ると「今宿の家」のように、南側に前面道路を有する住宅のファサードは、開口部が大きく取られていることがわかる。しかし今回の計画地のように北側に前面道路を有する住宅は、小さな開口が多数設けられ建物裏という印象が強く、また北側斜面ということもありファサードは形成されていない。



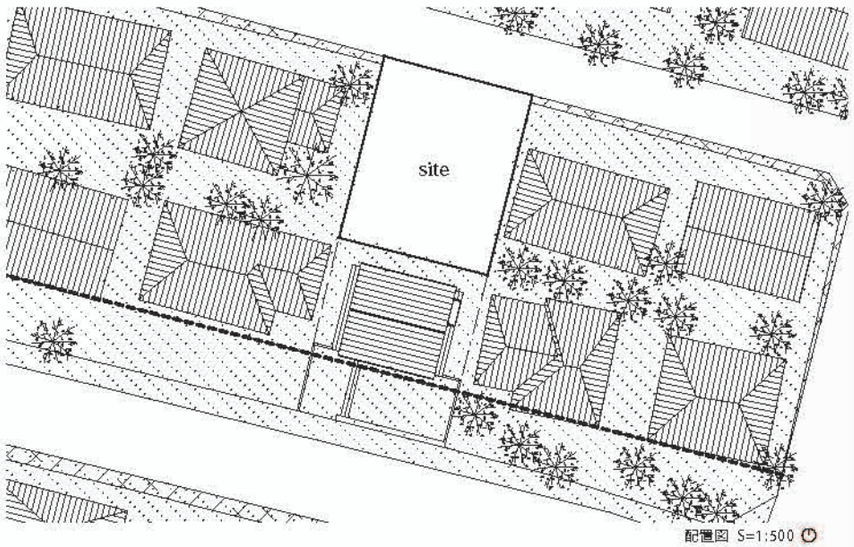
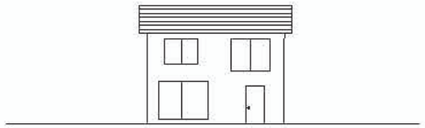




fig1.「今宿の家」ファサードとその後背部に現れる「金が谷の家」トップライト



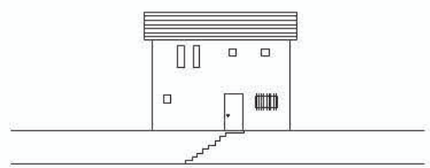
fig2. 南側に前面道路を有する住宅



大きな開口 fig2)が設けられ、ファサードを形成している。



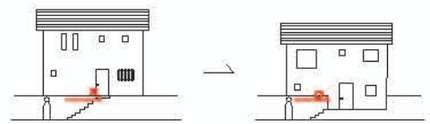
fig3. 北側に前面道路を有する住宅



小さな開口 fig3)が多数設けられ、建物の裏の印象が強い。



fig4.「金が谷の家」ファサード



建物が擁壁上にあるためアイレベルでは擁壁しか見えない。建物をアイレベルの高さまで押し下げ fig4)、開口の大きさと位置を見直すことで北側前面道路に対してファサードの形成を試みる。

iv .) House in Kanegaya

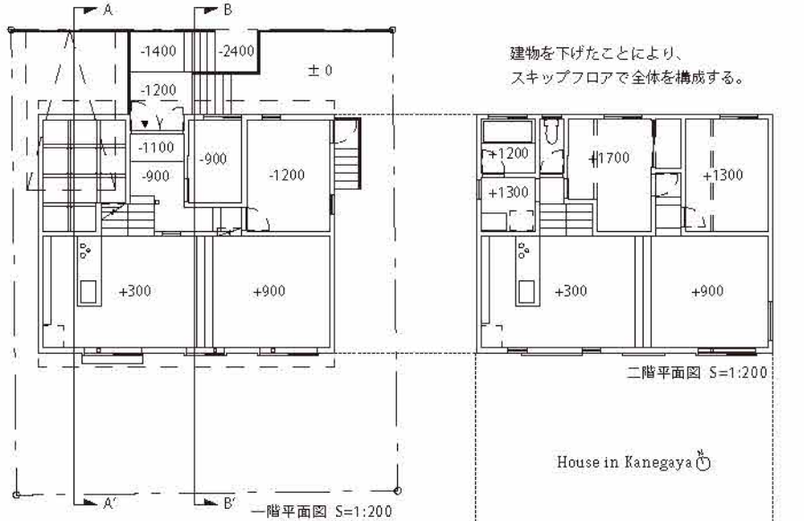
南側に面する室は、「今宿の家」主室の構成をオマージュしており、水平な天井と床のレベルの変化によって各場を形成している。それに対して、北側の室は完全に「今宿の家」と距離をとるために、建物中心の壁によって室同士が切り離されている。北側の室の採光は南面の屋根に設けられたトップライトにより得ている。

v .) Flow planning

スキップフロアのため主室まで玄関から階段６段で辿り着く。この構成は、９段の階段で主室に辿り着く「今宿の家」と同様である。動線の全体構成はスキップフロアにより、少ない段数で上階に上がることができる。最上階の主寝室には、トイレや風呂場に抜ける小さなにじり口により、動線は一筆書きのようにつながる。これは「今宿の家」へのオマージュである。

vi .) North side elevation

「今宿の家」に面する南側立面は、採光や動線に基づいた架構に左右されない自由な開口が開けられている。北側立面（ファサード）は、建物がアイレベルに入るように下げられ、この住宅地に漂わせるために開口の大きさは小さく開けられている。また、南側平面に設けられたトップライトから入る光が北側立面の窓を抜けて、前面道路にまで光を落とす。道路側から建物を見上げると、まるで窓が光っているように見える。



一階平面図 S=1:200

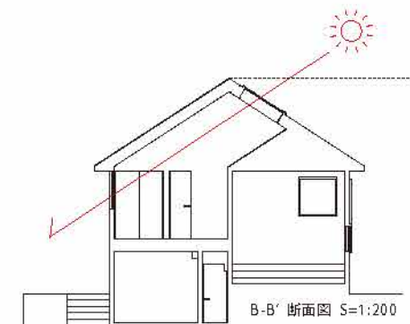
建物を下げたことにより、
スキップフロアで全体を構成する。

二階平面図 S=1:200

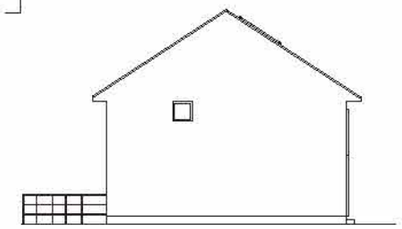
House in Kanegaya

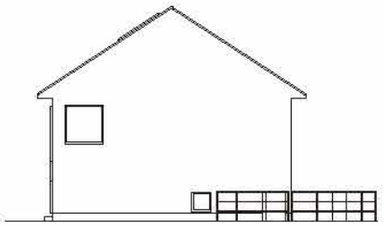

A-A′ 断面図 S=1:200

北側立面図 S=1:200

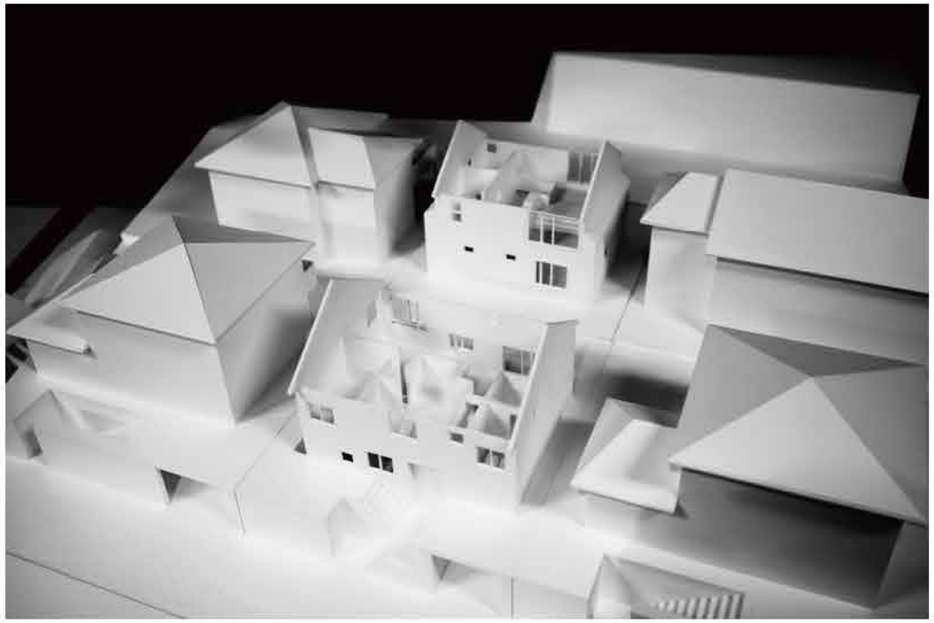

B-B′ 断面図 S=1:200


南側立面図 S=1:200

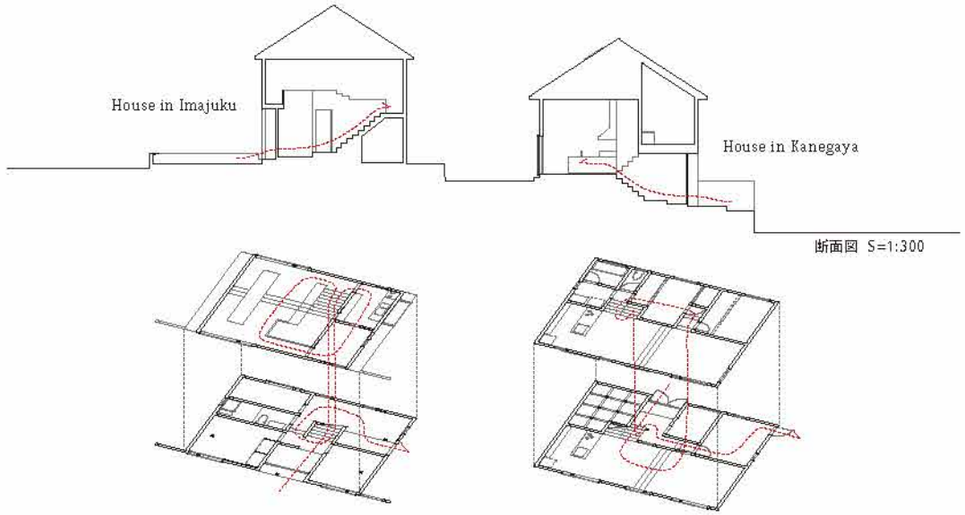

西側立面図 S=1:200


東側立面図 S=1:200





vii .) Cross-sectional composition



断面図 S=1:300



広域配置図 S=1:1200

分譲住宅地では、均質化した街並みが続いている。このような場所に、どのようにして新しく街並みを構築していくことが出来るだろうか。この問いの答えとして、周囲の住宅のコンセプトを一部オマージュし、そこに新しいコンセプトをつなげることで、新しく断面方向に街並みを形成することの可能性をこの住宅で示せたのではないだろうか。





CHAPTER 1:
Introduction

CHAPTER 2:
Collection of works: 01-07

Chapter 3:: Report (archive, credit)
記録（アーカイブ・クレジット）

CHAPTER 3
Report (archive, credit)



IWAOKA LAB shelf units

岩岡竜夫研究室（建築計画、意匠、設計）
(IWAOKA LAB. Architectural Planning and Design)：
すべての建物は「寸法」によってその形や空間が決定されています。建物や空間の寸法（サイズ）は、人々の思考や行動に対してさまざまな影響を与えています。岩岡研究室では、特に建物のスケール（大きさ）やモジュール（単位空間）に関する調査をベースとして、建築物、外部空間、街並、集落、都市空間などにみられるデザインの解読を試みています。そうした調査研究と並行して、住宅を中心とした実際の設計活動を展開し、新しい建築空間の創造に挑戦しています。

2014年度の研究テーマ
- 住宅建築に関する研究及び設計
- 建築の構法および素材に関する実践的研究
- 近代建築作品および伝統的集落に関する調査研究

Statement / 声明



『〈外景〉として都市住宅』
Modern House Scenery

［大学教授・建築家］
著者：岩岡竜夫

都市景観とは主に建物の外観が離散集合して構成されたものである。以前「日本の現代住宅には外観がない」と言った先生がいたが、それは実体として外観ではなく、風景や景観として外観、すなわち〈外景〉のことを指していることが分かった。どう見えるかとは相対的なものである。つまり、どんなに美しく見える建物もその建物の両隣あるいは前後の建物が陳腐であれば、その建物の評価は落ちるだろう。あるいは逆に、どんなにつまらなく見える建物でも、その周辺環境の中で価値をもつ建物もあるだろう。トリミングが自由な写真空間と視覚的にシームレスな現実空間との違いは大きい。つまり〈外景〉とは、周囲の環境との関係性から生まれる建築の外観の表情であり、その意味である。

乃木坂の住宅街の一角に建つ「乃木坂ハウス[fig1)]」は、同じ形の窓が付いたノッペリとした白い建物である。建物そのものは（大きさが異常に小さいものの）普通のビルのようにしか見えないかもしれないが、その「建ち方」は周囲の建物とかなり異なっている。他の建物に比べて道路に対してやや出っ張っている[fig2)]のである。つまり、道路斜線の（合法ではあるが）一般的なルールに則っていないからである。建物そのものだけを見ると目立った特徴はないが、街並み全体から見るとそれは異質な存在であり、すなわち目立っているといえる。東京あるいは日本の街並みの輪郭がこうした形で立体的に少しずつ更新されていくことに、可能性を感じている。

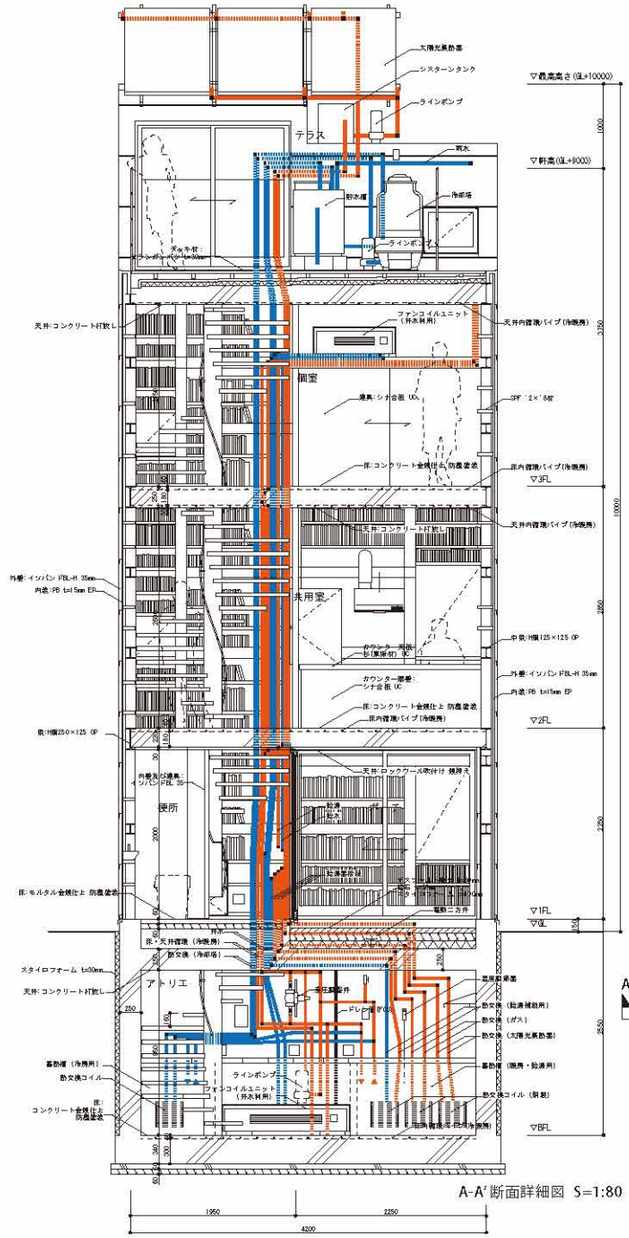


fig1.「乃木坂ハウス」近景

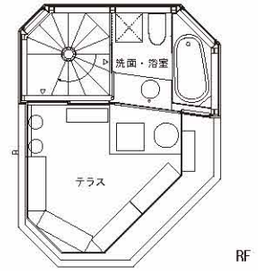


fig2.「乃木坂ハウス」遠景

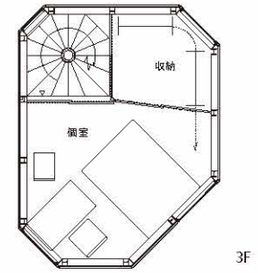
fig1.fig2＝アトリエ・アンド・アイ岩岡竜夫研究室「乃木坂ハウス」(2011) 一戸建て住宅+アトリエ
撮影協力：山田新治郎（Shinjiro Yamada）「山田新治郎写真研究室」<http://www.yamadashinjiro.com/>



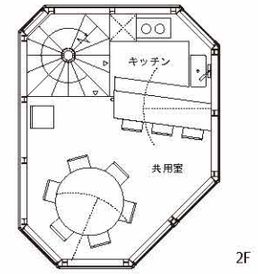
A-A′断面詳細図 S=1:80



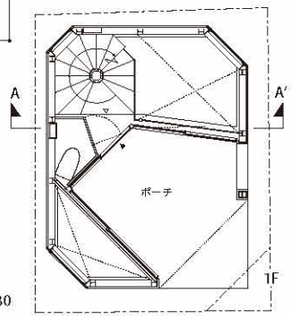
RF



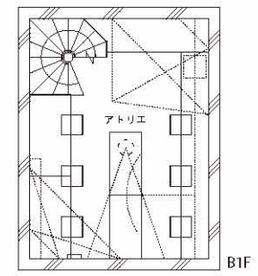
3F



2F



1F



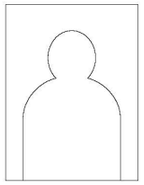
B1F

各階平面図 S=1:150

建物名称：乃木坂ハウス
設計　：アトリエ・アンド・アイ
　　岩岡竜夫研究室
住所　：東京都港区
竣工　：2011/12
構造　：鉄骨造一部 RC 造
建物用途：専用住宅+アトリエ
敷地面積：34.4m²
建築面積：22.3m²
延床面積：86.3m²
建蔽率　：64.7%（許容 70%）
容積率　：86.3%（許容 170%）
用途地域：第二種住居専用地域
　　第三種高度地区

約 10 坪の敷地内に、合法的に最大限の床面積（許容容積率は 160%）を確保するために、天空率によるヴォリューム設定、地下室および駐車スペースの設置、さらに天井高の低い収納スペースや屋上テラスなどを立体的に設けた。結果として建物の外形は、直方体の四隅を斜めに面取りした形状となり、それぞれの斜めの外壁面に開閉可能な開口部を設けることで、高密度な住宅地でありながら、周辺から十分な採光と通風を室内全体に取り入れている。さらに室内の温熱環境は、地下からの井戸水、天空からの太陽光や雨水などを補助エネルギーとするパッシブな輻射（＝放射）式冷暖房システムによって成立している。また外壁面の室内側にはＨ型鋼によるフィーレンデール形式の構造体が露出しているが、それらを壁面収納棚の一部として有効に利用している。

Architect / 選定名作住宅の設計者概要



No.00○○○○○○○

氏　　名 Taro Kenchiku　　事務所：○○○建築設計事務所

略歴：
主な作品：
主な受賞：

参考文献 / List of References

Front cover

奥佳弥（2009）『リートフェルトの建築』TOTO 出版 ,p.28-29
建築家山田守展実行委員会（2006）『建築家山田守作品集』東海大学出版会 ,p.126
東孝光（1982）『別冊新建築 1982 日本現代建築家シリーズ④ 東孝光』新建築社 ,p.62
宮脇檀（1980）『別冊新建築 1980 日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀』新建築社 ,pp.132-133
千葉学（2008）『Heavenly Houses 3 住吉の長屋 / 安藤忠雄』東京書籍 ,p.17
篠原一男（2011）『Kazuo Shinohara:Casas/Houses』2G,p.163
坂本一成研究室 , 新建築社（2008）『坂本一成 / 住宅 (Kazunari Sakamoto/Houses)』新建築社 ,p.40

Chapter 2

p.18　東孝光（1982）『別冊新建築 1982 日本現代建築家シリーズ④ 東孝光』新建築社 ,p.63
pp.20-21　奥佳弥（2009）『リートフェルトの建築』TOTO 出版 ,pp.28-29,p.45
p.24　奥佳弥「シュレーダー邸、1924 年 一家具から建築へ」(1998)『デ・ステイル 1917-1932』河出書房新社 ,pp.126-129
p.24　奥佳弥（2009）『リートフェルトの建築』TOTO 出版 ,p.33
pp.30-31　建築家山田守展実行委員会（2006）『建築家山田守作品集』東海大学出版会 ,p.118.120.126
p.40　五十嵐太郎 監修 , 新建築社（2014）『戦後日本住宅伝説 挑戦する家・内省する家』新建築社 ,p.56
p.41　東孝光（1982）『別冊新建築 日本現代建築家シリーズ④ 東孝光』新建築社 ,p.62.63
p.45 『法 14 条地図』東京法務局
p.45 『渋谷区都市計画図』渋谷区都市計画課都市計画係〈https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kurashi/machi/toshi_sodan.html〉
p.45　東孝光（1988）『「塔の家」白書』住まいの図書館出版局 ,p.105
p.50　五十嵐太郎 監修 , 新建築社（2014）『戦後日本住宅伝説 挑戦する家・内省する家』新建築社 ,p.87
p.51　宮脇檀（1980）『別冊新建築 日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀』新建築社 ,pp.132-133 ,p.135
p.54　宮脇檀（1980）『別冊新建築 日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀』新建築社 ,p.135.137
pp.60-61　千葉学（2008）『Heavenly Houses 3 住吉の長屋 / 安藤忠雄』東京書籍 ,p.17.60
p.61.64　安藤忠雄「都市ゲリラ住居」（1973）『臨時増刊号 都市住宅 住宅第 4 集』鹿島出版会 ,pp.18-19
p.64 『大阪市建蔽率許可制度』大阪市住宅局建築指導部建築企画課
p.64　千葉学（2008）『Heavenly Houses 3 住吉の長屋 / 安藤忠雄』東京書籍 ,pp.64-65.70-81
pp.70-71　篠原一男（2011）『Kazuo Shinohara:Casas/Houses』2G,p.163.169
p.71　篠原一男「第三の様式」（1977）『建築雑誌 新建築 1977 年 1 月号』新建築社 ,p.219-228
p.74　篠原一男（2011）『Kazuo Shinohara:Casas/Houses』2G,p.74.100.104.162.240.159.197.211
pp.80-81　坂本一成研究室 , 新建築社（2008）『坂本一成 / 住宅 (Kazunari Sakamoto/Houses)』新建築社 ,p.40.43
p.71　坂本一成「家形を思い、求めて」（1979）『建築雑誌 新建築 1979 年 2 月号』新建築社 ,pp.215-221
p.84　坂本一成（2014）『坂本一成 住宅めぐり』フリックスタジオ ,p.48

Chapter 3

p.93　図版出展：岩岡竜夫「乃木坂ハウス」アトリエ・アンド・アイ岩岡竜夫研究室

Photograph

山田新治郎（Shinjiro Yamada）「山田新治郎写真研究室」〈http://www.yamadashinjiro.com/〉: p.06.92
堀越一希（Kazuki Horikoshi）: pp.07-12 ,p.15.22.23.28.29.32.33.38.40.39.42.43.52.53.58.59.62.63.64.66.67.72.73.82.85.87.89.97.99 ,Back cover



No.01 シュレーダー邸
ヘリット・トーマス・リートフェルト Gerrit Thomas Rietveld

略歴：1888 年 オランダのユトレヒトに家具職人の次男として生まれる。1904 年 ユトレヒト美術・美術工芸学校夜間コースで学び、昼間 C・J ベヘール銀器製造会社で見習いとして働く。1917 年 家具作家として独立し、家具工房を設立。1925 年 建築家として独立。1961 年 J・ファン・ディレン、J・ファン・トリヒトとパートナーシップを組む。1964 年 シュレーダー邸にて逝去。
主な作品：レッド&ブルー・チェアー（1923）、シュレーダー邸（1924）、ローハウス - ユトレヒトの低層住宅（1931-1934）ゴッホ美術館（1956）など
主な受賞：世界遺産「シュレーダー邸」（2000）など。



No.02 山田守邸
山田守 Mamoru Yamada　　事務所：山田守建築設計事務所

略歴：1894 年 岐阜県羽島郡上中島村に生まれる。1920 年 東京帝国大学工学部建築学科を卒業し逓信省に入省する。同年、青年建築家のグループ分離派建築会を結成する。1946 年 通信建設工業株式会社を設立する。1949 年 山田守建築設計事務所を設立。1951 年 東海大学の理事に就任し、工学部建設工学科の主任教授も兼ねる。1966 年 逝去。
主な作品：聖橋（1927）、東京厚生年金病院（1953）、山田守邸（1959）、京都タワー・ビル（1964）、日本武道館（1964）など。
主な受賞：芸術選奨（文部大臣賞）「旧東京厚生年金病院」（1953）、日本建築学会賞作品賞「旧大阪厚生年金病院」（1954）、藍綬褒章（1964）など。



No.03 塔の家
東孝光 Takamitsu Azuma　　事務所：東孝光建築研究所

略歴：1933 年 大阪府で生まれる。1957 年 大阪大学工学部構築工学科を卒業し郵政省大臣官房建築部に入る。1960 年 坂倉準三の坂倉準三建築研究所の大阪事務所に移る。1966 年 独立 自宅内に東孝光建築研究所を設立。1985 年 大阪大学工学部環境工学科教授に就任。事務所名を「東環境・建築研究所」と変更し、代表に長女東利恵が就任する。1997 年 大阪大学名誉教授となり、千葉工業大学工業デザイン学科の教授となる。2015 年 逝去。
主な作品：塔の家（1966）、さつき保育園（1973）、ワット・ハウス（1977）、阿佐ヶ谷の家（1993）、姫路工業大学書写紀念会館（1955）など。
主な受賞：日本建築学会賞作品賞「塔の家から阿佐ヶ谷の家に至る一連の都市型住宅」（1995）など。



No.04 松川ボックス
宮脇檀 Mayumi Miyawaki　　事務所：宮脇檀建築研究所

略歴：1936 年 洋画家宮脇晴とアップリケ作家の宮脇綾子の子として愛知県名古屋市で生まれる。1959 年 東京芸術大学美術部建築学科卒業。1961 年 東京大学大学院修士課程高山研究室 修了。1964 年 一級建築士事務所 宮脇檀建築研究室を設立。1991 年 日本大学生産工学部建築工学科教授就任。1998 年 逝去。
主な作品：もうびいでいっく（1966）、松川ボックス（1971）、伊藤清永美術館（1990）、姫路市書写の里・美術工芸館（1994）など。
主な受賞：日本建築学会賞作品賞「松川ボックス」（1980）、グッドデザイン賞 施設部門「フォレステージ高幡鹿島台」（1999）など。



No.05 住吉の長屋
安藤忠雄 Tadao Ando　　事務所：安藤忠雄建築研究所

略歴：1941 年 大阪府大阪市港区に生まれる。1965 年 この年より 4 年間、2 度にわたり世界を放浪。1969 年 安藤忠雄建築研究所を大阪に設立。1997 年 東京大学工学部教授に就任。2002 年 南カリフォルニア大学客員教授。2005 年 東京大学特別栄誉教授。2005 年 安藤忠雄文化財団を設立。2011 年 東日本大震災復興構想会議議長代理。2012 年 新国立競技場 国際デザイン・コンクール審査委員長。国立競技場将来構想有識者会議委員。現在に至る。
主な作品：住吉の長屋（1976）、六甲の集合住宅（1983）、光の教会（1989）、フォートワース現代美術館（2001）、表参道ヒルズ（2006）など。
主な受賞：日本建築学会賞「住吉の長屋」（1979）、日本芸術大賞（1994）、プリツカー賞（1995）、国際建築家連合 UIA ゴールドメダル（2005）など。



No.06 上原通りの住宅
篠原一男 Kazuo Shinohara　　事務所：篠原一男

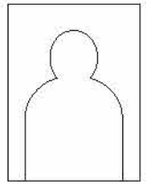
略歴：1925 年 静岡県生まれ。1947 年 東京物理学校卒業、その後東北大学で数学を学ぶ。建築に転向し、1949 年 東京工業大学建築学科に入学し、清家清に師事。卒業後、同大学助手。1970 年 同大学教授。1986 年 東京工業大学名誉教授。同年一退官に至るまで東工大の教壇に立つ。東工大教授の他、イエール大学客員教授、ウィーン工科大学客員教授。2006 年 逝去。
主な作品：土間の家（1963）、白の家（1966）、未完の家（1970）、上原通りの住宅（1976）、日本浮世絵博物館（1982）、東京工業大学百年記念館（1987）など。
主な受賞：日本建築学会賞「未完の家、以後の一連の住宅」（1972）、紫綬褒章（1990）、毎日芸術賞特別賞受賞（1997）、日本建築学会大賞（2005）など。



No.07 今宿の家
坂本一成 Kazunari Sakamoto　　事務所：アトリエ・アンド・アイ坂本一成研究室

略歴：1943 年 東京都に生まれる。1963 年 東京都立立川高等学校卒業。1966 年 東京工業大学卒業。1971 年 東京工業大学大学院博士課程を経て武蔵野美術大学建築学科専任講師。1977 年 同大助教授（現准教授）。1983 年 東京工業大学助教授（現准教授）。1991 年 同大教授。2009 年 東京工業大学退官 同大名誉教授。現在に至る。
主な作品：水無瀬の町家（1970）、代田の町家（1976）、今宿の家（1978）、House F（1988）、コモンシティ星田（1992）、東工大蔵前会館（2009）など。
主な受賞：日本建築学会賞作品賞「House F」（1990）、村野藤吾賞「コモンシティ星田」（1992）など。

Member / 2015年度修士課程岩岡スタジオ履修者一同



No.00 ○○○○○○○

氏　　名 Taro Kenchiku　　所属：○○研究室 修士○年

1— 設計やプレゼンで意識したことを教えてください

2— 最終課題『住宅設計』を通して、なにを学びましたか

選定した名作住宅から、履修者7人の建築的な趣味嗜好や経験が垣間見えることもこの課題の機知な面白さであるといえる。例えばNo.01国分元太さんは、インターナショナルな彼の人柄や実際の訪欧経験に起因して、ひとり異国の「シュレーダー邸」を選んだのだろう。一方で、No.04玉江将之さんの「松川ボックス#4」では、木造在来構法の実務経験に触れた彼なりのアプローチが、野心ある鉄骨造へとその姿を変え、訴求力を増している。さらに言えば、「塔の家」を選んだNo.03齊藤誠司さんと東孝光氏の出身校が、偶然にも同一であることが出版間際に発覚した。何らかの因果関係が有る無しにせよ、自らが"面白い"と思い選んだ名作住宅に〈挑戦状を叩き込む〉という目線でみたとき、決して保守的にならず屈強な野心をもって臨んだ意識が、意欲的なアウトプットとなって各人の設計に現れていた。改めて作品を俯瞰してみても、どれひとつとして混じり気の無い、癖のある「建ち方」をしているという事実が、各人が悩み葛藤した末に導き出した〈答え〉を物語っている。

第一号となる本書が出版されることになったキッカケの一つとして、例年に比べ修士課程へと進学する意匠系が非常に多かったという事実が挙げられる。数多くの猛者達が互いに切磋琢磨しながら課題に取り組むことで、個人のレベルを高めながらもお互いを認めあい、信頼関係を築き上げてきた。修士課程最後の課題を「住宅設計」で締めくくるということ、しかも、戦後名作住宅の超近接に設計するという大往生は、修士設計を控えた私たちに深い思考能力と詳細な設計能力を試す最後の試練を与えてくれたと思う。本書を第一号として、初陣である岩岡スタジオのメンバーをここに記録する。



課題履修者一同（左から、國分、齊藤、外川、玉江、堀越、大村、江間）2016/02/13



No.01 シュレーダー邸

國分元太 Genta Kokubu　　所属：山名研究室 修士1年

1— 設計では椅子からの過程を明確にするようにしました。悩んだら主観によるカッコよさを大切にし判断していきました。プレゼンでは原点回帰し、きれいな白模型をつくるよう心掛けました。

2— ふと思い立って学部2年時の住宅課題と今回の住宅を見比べたら、どちらも住みにくそうだなあと思いました。この課題では住宅と都市の関係について、他の人の案を通じて多く学べたと思います。



No.02 山田守邸

外川喜裕 Yoshihiro Togawa　　所属：岩岡研究室 修士1年

1— 古き良き蒸珈琲店、こじんまりした和のギャラリー、それらと共鳴する庭のみどり。忙しなく変わる表参道の中でこの「山田守邸」は独特の情味をもつ。そのあたたかさを創出・表現すること。

2— 田舎者の自分にとってここらは背伸びが必要な場所だった。表参道に遊び、その緊張に馴染む頃に出逢ったこの建築物は山田守を知らなくても何かを感じた。そして、そのようなものと触れ合い、観察・分析し、まねること。



No.03 塔の家

齊藤誠司 Seiji Saito　　所属：安原研究室 修士1年

1— 混沌とした敷地のコンテクストからコンセプトとなるものを丁寧に取り出すことと、街での体験が住宅内にも取り込まれるようなプランニング。そして、社会に出ると当分経験できない住宅の設計を楽しむこと。

2— 法規に対する意匠的回答の難しさと、建築をコンセプチュアルに現実のものとする中で生まれる建築家の葛藤。加えて、計画性の重要さと結局何とかなるということを再び思い知らされた。



No.04 松川ボックス

玉江将之 Masayuki Tamae　　所属：岩岡研究室 修士1年

1— 「松川ボックス」への視線・動線をどのようなかたちで繋げていくかを意識しながら設計を進めた。また、当時宮脇檀が都市に対して意識していた「建ち方」をふまえて、自分なりのアプローチから現代の「建ち方」を考えた。

2— 住宅設計を通して自分がどれだけ、一般的に規格化されている住宅スケールが身に染まっているかを学んだ。今後は、こういったスケール感に対して疑いをもって設計と向き合っていきたいと思う。



No.05 住吉の長屋

堀越一希 Kazuki Horikoshi　　所属：岩岡研究室 修士1年

1— 戦後名作住宅の目の前に建てるという無理難題に対して、とにかく徹底的に、徹底的にやらなければと思って取り組んだ。結局「住吉の長屋」に若干引っ張られていることは否めない、反省です。

2— 40年前、安藤忠雄が単純な箱の中にこれほどの収まりと情報量を与えていることを目の当たりにして驚愕した。安藤はすごい。と同時に、負けてられないなあと改めて感じた。



No.06 上原通りの住宅

大村高広 Takahiro Omura　　所属：岩岡研究室 修士1年

1— 今回の課題は「過去の名作住宅の現代化」と「建ち方」という、2つの難しい問題を同時に相手にする必要があったので、「上原通りの住宅」をどう読めば「建ち方」の問題へと議論がシフトするのかということを考えていました。

2— やっぱり住宅は難しい。与条件をかなりクリアにして解いていかないとリアリティが出ず、かといって実務的にやり過ぎても、アンビルドの課題として意味がなくなるからです。でもおもしろかった。



No.07 今宿の家

江間匠太 Shota Ema　　所属：岩岡研究室 修士1年

1— 坂本先生の住宅を邪魔しないように、だけど周囲の住宅とは違う雰囲気で、この分譲住宅地に漂わせたかった。プレゼンでは、あえてこの地味さを出していることを伝えることを意識した。

2— 自分は、住宅の設計が一番難しいと思っている。学生最後の課題として住宅設計を取り組むことができたのは、本当によかった。今回の設計を通して、改めて住宅設計の難しさを学んだ気がする。

Epilogue / あとがき

課題提出前、岩岡先生が私たちに突然「この課題を本にしようかと思っている。」とおっしゃった。ただでさえ、名作住宅の超近接に設計するという大仕事にさらに拍車をかけ、ハードルを上げられたのだ。他スタジオで教鞭をとる安原幹先生は中間講評の終わり際「これはまたエグイ課題だな ...。」とこぼしていたのを小耳に挟んだ。苦笑いをしたのは私だけではないはず。思い返してみれば最終課題で住宅を設計するという、他大学でさえ中々味わえないこの経験に面白さを覚えて履修してみたものの、理科大の学部２年時に通り過ぎた、まだ駆け出しの初々しい住宅設計とは天と地の差である。それもそのはず「建ち方」に正解など無く、設計者である住宅を調べれば調べるほどその住宅作品の素晴らしさに改めて気づかされる。自身の設計と名作住宅を比較して暗中模索しながら葛藤する日々が続いていた。皆口を開けば「意味がわからない」「勝てる気がしない」と、行き場のない愚痴を仲間内で言い合っていた。そのためか、最終講評では他者が一体名作住宅に対してどのようなアプローチを仕掛け、住宅設計を紐解いていくのか自分の作品以上に期待していたことを覚えている。〈名作住宅 vs 現代住宅〉という非常に皮肉れたプログラムだからこそ、通常の設計課題では決して得られない、自分の案との相対的な視点を獲得することができた。それだけでも、この課題が非常に有意義であったことは間違いないだろう。全体を通して、これまでの課題としては最も濃密な設計と思考能力を養えたことに疑いはない。非常に辛く、吐きそうになるが、面白かった。ただひたすら、やりがいのある課題だった。

第一号となる本書を出版するにあたって、データ入稿やレイアウトのすべては学生が担当し企画・編集・出版を行った。課題の一環として、終了後このような冊子を作成し読者に読んでいただけるという自覚は、少なからず課題履修者の意識を高め、作品の質を向上させたと思う。それだけでなく、修士課題を記録として残し、後輩へとバトンを渡す第一号という意味でも大きな足跡を残せたのではないか。

最後に、本課題出題者である岩岡先生には各作品に対し、温かくも厳しいお言葉を寄せていただきました。ならびに、協賛していただいた総合資格学院様には本書出版にあたり多大なるご協力を承りましたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。また、各ページのオリジナルデータを作り上げてくださった学生編集協力のみなさん、ご協力ありがとうございました。願わくば10年後、この冊子を読み返しながら「自分達もまだまだだったな」と岩岡先生と履修者７人で笑いながら酒の肴にでもしたいと思っています。

[著 : 堀越一希]

MODERN HOUSE SCENERY

東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻
岩岡スタジオ作品集２０１５
Students Projects of Graduate School of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science
IWAOKA Studio 2015

発行日
2016 年 3 月 9 日　初版第一刷発行

発行
東京理科大学岩岡研究室
〒 278-0022　千葉県野田市山崎 2641
東京理科大学野田校舎二号館四階岩岡研究室
ダイヤルイン : 04-7122-9420
学科事務室内 : 04-7125-7533
URL : http://www.rs.tus.ac.jp/iwaokalab/home.html

編集委員
岩岡研究室

編集協力 (学生)
江間匠太　大村高広　國分元太　齊藤誠司　玉江将之　外川喜裕　堀越一希

企画編集
岩岡竜夫　堀越一希

デザイン
堀越一希

協賛
株式会社 総合資格

本書の一部または全部を無断で複写、複製、転載、あるいは磁器媒体に入力することを禁じます。



19XX [FRONT]
G.T.RIETVELD
MAMORU YAMADA
TAKAMITSU AZUMA
MAYUMI MIYAWAKI
TADAO ANDO
KAZUO SHINOHARA
KAZUNARI SAKAMOTO

MODERN HOUSE SCENERY

> [BACK] 2015
GENTA KOKUBU
YOSHIHIRO TOGAWA
SEIJI SAITO
MASAYUKI TAMAE
KAZUKI HORIKOSHI
TAKAHIRO OMURA
SHOTA EMA